

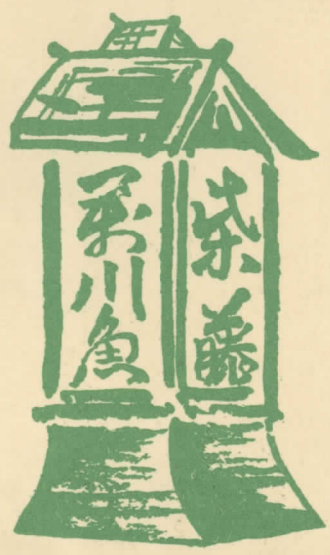
道 類 編

昭和十二年六月廿五日
昭和十一年七月廿五日
新百六號 第十卷 第七月號
第三號 每月一回
「道類編」



第十年七月號

魚川野鰻
 菜女
 料理



柴藤食堂

二階 椅子席
 三階 宴會場

電話南 四八一〇
 四五二
 四八四四

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

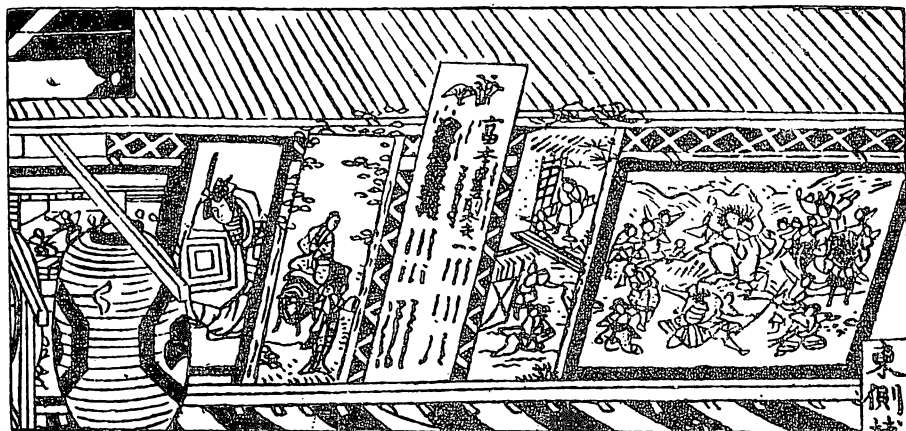
御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

大阪支店 心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋





東側註

◇道頓堀。第六六輯。七月號◇

★繪 口★

回歌舞伎座・合同劇。楳屋庄助壽三郎。おせん水谷。西鶴五人女舞臺面。魚屋榮五郎
 梅島。小鶴水谷。兒故の春舞臺面。馬追又九郎壽三郎。桂市兵衛田之助。世に出ぬ豪
 傑舞臺面。手代久七小太夫。長左衛門田之助。世に出ぬ豪傑舞臺面。伊佐大助梅島。
 妻千鶴子筑波。女一代舞臺面。おゆき水谷。おとら村田。回神戸松竹劇場。暗闇の丑
 松菊五郎。有難御江戸景清。暗闇の丑松菊舞臺面。猿廻し與次郎菊五郎。近頃河原の丑
 遠引。船辨慶。妙道成寺。舞臺面。浪花座。女房お岩右團次。伊右衛門吉三郎。岩代
 多喜太段猿。駒澤次郎左衛門霞仙。朝顔錦吾。五郎延之助。舞鶴延二郎。小猿七之助
 霞仙瀧川成太郎。權三と助十舞臺面。回角座。雲切仁左衛門辻野お夏福岡。辻田巡査
 辻野。捜査係長小笠原。司法主任玉川。

★扉

水谷の小鶴(スケッチ)

「世に出ぬ豪傑」に就いて……………長谷川 伸(二)

「權三と助十」……………岡本綺堂(四)

右團次の四谷怪談……………高安吸江(六)

上演歌舞伎解題……………高谷 伸(八)

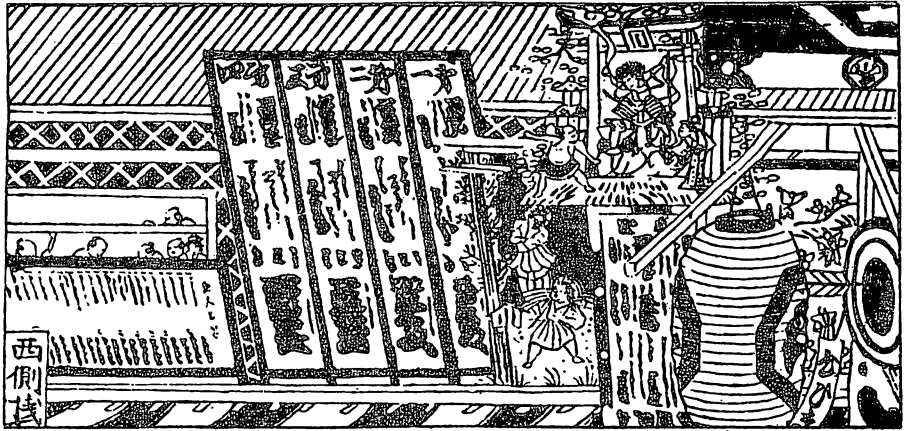
節酒の辨……………世話垣鈍文(二〇)

夜明し忠臣蔵……………梅島 昇(三)

忠治と提灯……………市川段猿(三)

私の特ダネ

辻野良一(四)



忍術の怪談……………大澤休象(五)

壽三郎と八重子……………桂田曉香(三)

静間小治郎を語る……………菱田正男(二六)

關西歌舞伎をどう生かすか……………大橋孝一郎(三四)

芝居西鶴五人女……………歌舞伎座(一八)

物居暗闇の丑松……………松竹劇場(二〇)

語女一代……………歌舞伎座(二八)

漫・新版お岩物語……………大槻たもつ(一五)

講・新版四谷怪談……………妹背平三(四〇)

漫談俳優なりせば……………花月亭九里丸(二四)

お岩様藝談集……………(三〇)

道頓堀六號新聞……………(三六)

劇評。六月の芝居から……………西尾福三郎(三一)

歌舞伎座總配役……………(三二)

編輯後記……………村上勝(四)

カッ ト……………田中滿彦

冷用
銘酒

白雪

涼味湧く

この一盞!

根津 伊丹 灘

小西酒造株式會社



● 歌舞伎座・七月興行
 男女優大合同劇 ●

樟屋庄助……

……阪東壽三郎

「西鶴五人女」

おせん……

……水谷八重子



西鶴五人女「舞臺面」

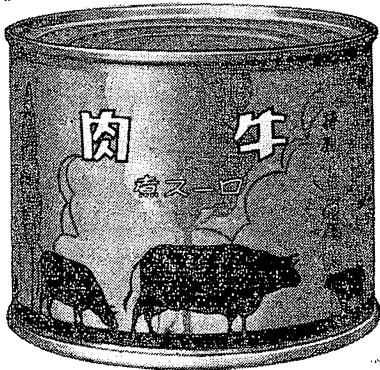


「兒故の春」

(上) 魚屋榮五郎…梅島昇
 (左) 小鶴…水谷八重子
 (下) 「兒故の春」舞臺面

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉
で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さ
い



洋酒・飲料水・罐詰

株式会社 横山商店

大阪東區豊後町三

「傑豪ぬ出に世」

郎三壽東阪……郎九又追馬 (上)

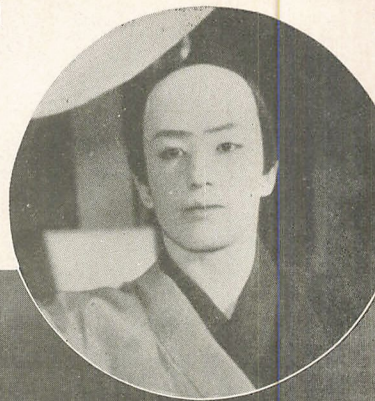
面臺舞「傑豪ぬ出に世」 (中)

助之田村澤……衛兵市桂 (下)

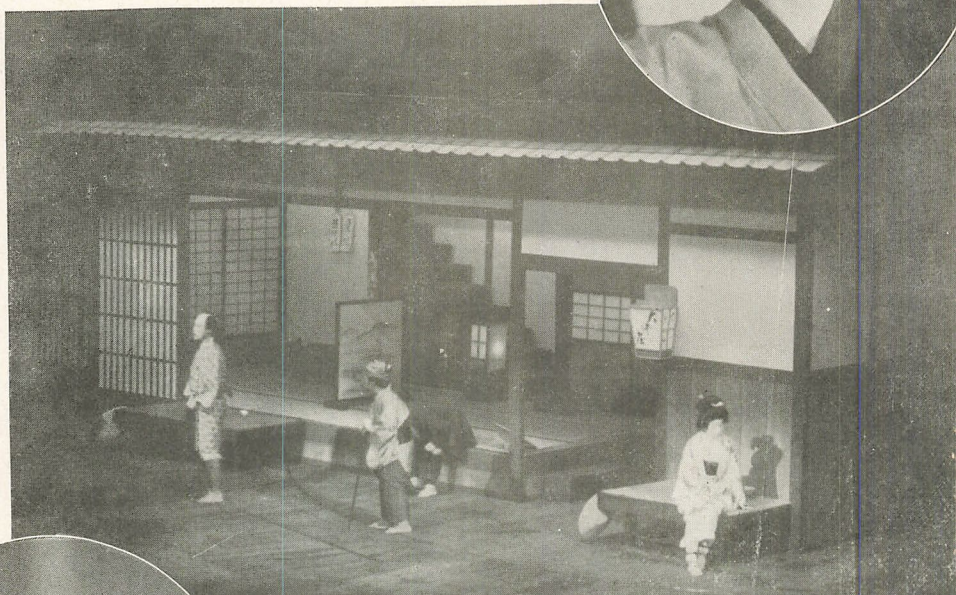




夫太小川市……七久代手屋廻 →



麴屋長左衛門……澤村田之助 ↓



面臺舞「女人五鶴西」(上)

面臺舞「傑豪ぬ出に世」(下)





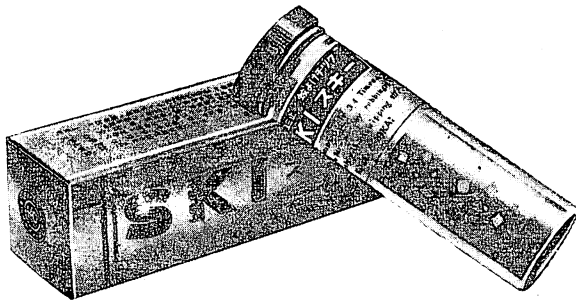
小道具・小裂
貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

其他一般の衣裳に拘御利用下
さ御來客の相談に應じ便利よ
お取計ひら致す……

松竹衣裳部

本店 大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
東京支店 東京市淺草區駒形町二十三番地
電話 淺草 六 六 六 一 番



カユミ止
蚊よけ
チツク型

SKI
スキ

毒虫ノ襲來ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫

等嫌ナ毒虫モスキノ使用ニ依テ完全ニ驅逐ス

カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ルカユミヲ即座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト

雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨク

住香ニ富ム且搔痒部ノ搔傷ニヨル化膿菌ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

スキー使用法

チツク型ナレバ使用上非常ニ簡便ニシテ右圖ノ如ク銀包紙ノ所ヲ持つテ藥品ノ露出部ヲ目的ノ個所ニ輕ク塗擦スレバ足ル

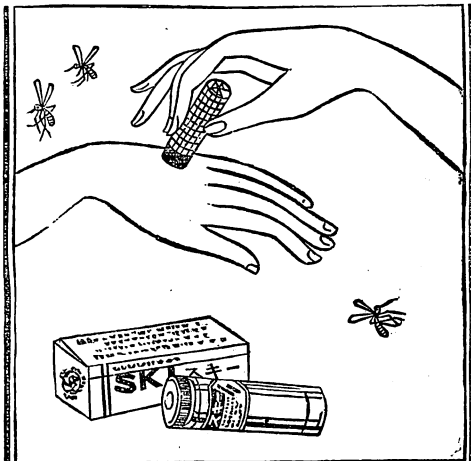
價四十錢

製造發賣元

光 榮 商 會

大阪市東區伏見町三丁目二七

電話本局三三一五番
振替大阪三三一七番

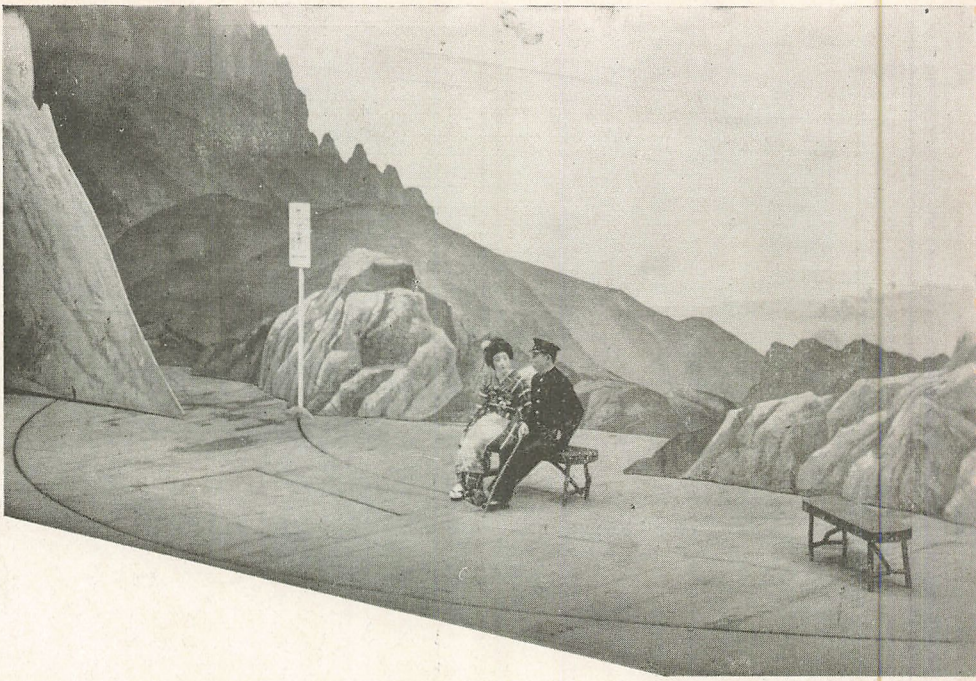




妻 千鶴子…筑波雪子
 伊佐大助…梅島昇

(下)「女一代」舞臺面





「代 一 女」

昇 島 梅…助 大 佐 伊
子 重 八 谷 水…き 仰 お



子 重 八 谷 水…き 仰 お
子 久 嘉 田 村…め と お

陣作名興新たる爽颯に月縁

豊公生誕四百年記念映画

サウンド
太閤記

尾上榮五郎主演

トール
新納鶴千代

阪東妻三郎主演
松竹プロック總動員

トール
荒木又右衛門

嵐 寛壽郎主演
松竹プロック總動員

トール
薩摩隼人

杉山昌三九主演
新興京都總動員

大毎連載・久米正雄原作

サウンド
龍涎香

高田稔主演
伏見信子、山路ふみ子、岩田
祐吉、霧立のぼる、江川なほ
み、伏見直江

サウンド
戀の浮島

伏見信子・立松晃主演

大朝連載・片岡鐵兵原作

トール
花嫁學校

霧立のぼる主演
江川なほ、日下映子
新興東京總動員

店支阪大社會式株マネキ興新

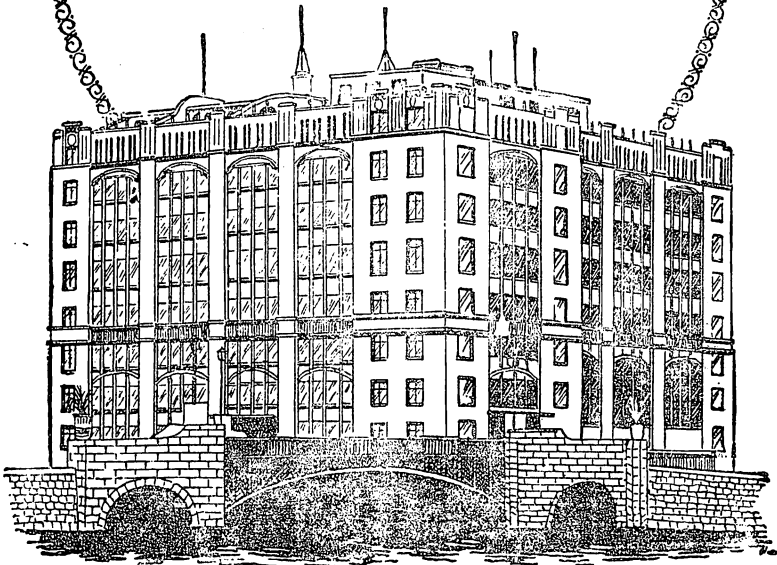


大 同 生 命

堅實本位に
そして最も有利なる
配當付特別養老保險

大阪 土佐堀

規則書送呈





郎五菊上尾……松丑の闇暗

「松 丑 の 闇 暗」

伎 舞 歌 大 京 東

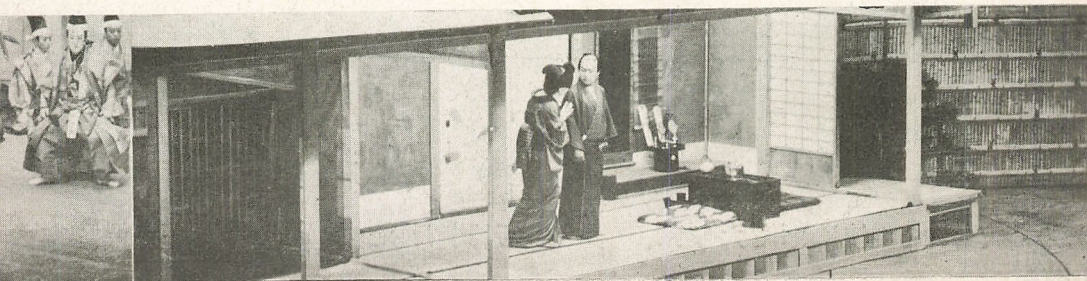
行 興 月 七 場 劇 竹 松 戸 神

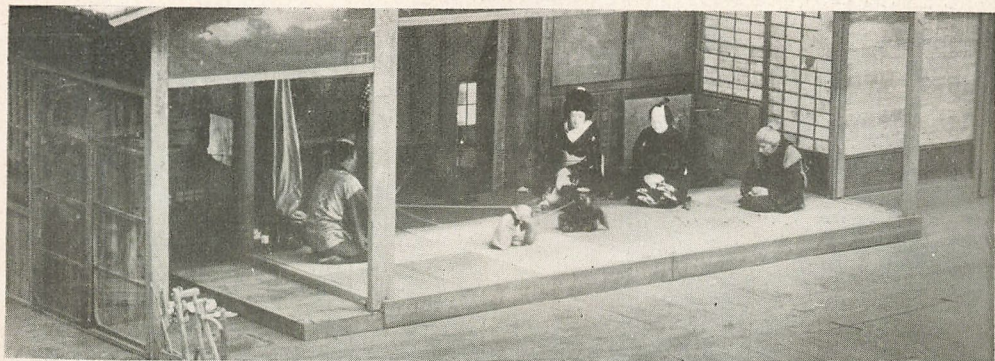


• 猿廻し與次郎 • 菊五郎

(上) 有難御江戸景清
(下) 暗闇の丑松

舞臺面





• 平知盛の靈・菊五郎 •

(上) 「近頃河原の達引」

(下) 船 辨 慶

奴 道 成 寺

舞 臺 面



浪花座七月初涼芝居
關西花形大歌舞伎

女房お岩・市川右衛門次 (右)

民谷伊右衛門・吉三郎 (下)



茶

西區又子何野一

坐半

南區又子何野一

御中元御贈答用には

化粧函入

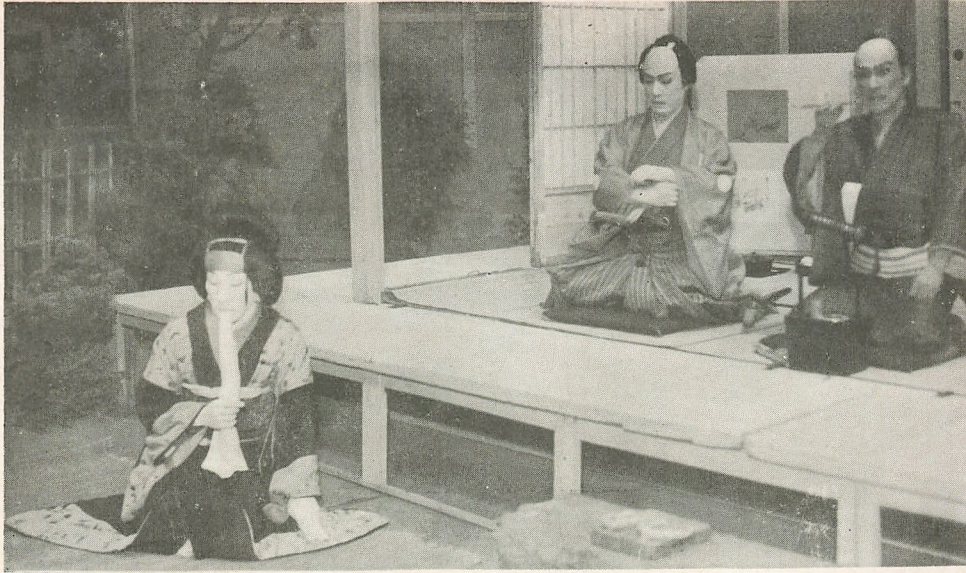
アサヒビール スニオンビール

清涼飲料

リボンシトロン
三ツ矢サイダー



大日本麦酒株式会社 宮内省御用達



(上) 「生寫朝顔日記」

岩代多喜太……段 猿

駒澤次郎左衛門 ……露 仙

朝 顔……錦 吾

(左) 「草摺引」

五郎時致……延之助

遊君舞鶴……延二郎



面臺舞 「十助と三権」

「神鳴色其何」 (上)

郎太成・川 瀧 仙 露・助之七猿小

辻野良一奮闘劇角座七月公演

「雲切仁左衛門」

水茶屋の女お夏……福岡君子

雲切仁左衛門……辻野良一



「警官決死隊」

池澤捜査係長・小笠原茂夫

辻田巡査・辻野良一

富森司法主任・玉川昇



藝雜・秀新劇演・刊月

七月號

通類編

第十年

第六百輯



七月の歌よりの白屋

兒故の春

水若入皇子の小鶴

一九三三

水若入皇子

も市兵衛、この方に力をそゝいだ心算だったが、拙いので思つた如くにならなかつた。この作のなかで書き方の拙い第一は村長の娘で、今でも女が掛けないが、殊にこの作では、紅一點の女性がまるでかけてゐない。今度の上演では幕開きの仕出しと農人とが多く出て臺詞をいろ／＼云つてゐるのだが、前にいつた松竹座の時に、私が拒絶した。これは座附作者の改竄の部分で、「分散」を最散に醸してゐる。

早く心付けば撤回を求めたのだが、あの初日といふ時に知つたので、還元がでなかつたのをその儘、観念して大阪も還元せずに置くことにした。

もつとも、私の作の通りでは、農人の臺詞を冗長で場面が淋しい、さりとて今度やつてゐる改竄がいゝと思ふのでないこと勿論である。いけないといふ譯は、主人公で出までに諒解と期待とをつくらねばならないのに、その、反對の、劇曲の手法として分散の拙さがあるからある。

施聞評はよかつたが、私としてはこの劇曲はまづいものだとする、一般的な方面の観客のうち、過半は狐

に魅まれたやうで、所謂ウケなかつたその原因は、諷刺がわからなからケロリと見過したといふ處にある。作は拙いが、作の意味だけ判つてくれれば良い、その意味がまるで判らなかつた。

拙いまづいと私がつてゐるのは、作の性根ではない、組立や布置や性根はあれでいゝが、言葉がいけない、あゝいふ作にはもつと洗練した言葉で表現しないと駄目だ。

東京では批判者にはウケたが、一般的な観客の過半にはウケなかつた。

大阪では藤島一虎君の「薩摩隼人」がウケ、私の「心中越路の雨」のあんな陰鬱なものが容れられ、私の「荒木又右衛門」が容れられたことは、従来よくいはれてゐる「大阪は甘い本でない」とアキまへんわ」が嘘になつたゐるものと私はとつてゐる。

もし、さうだつたら、観客の半分には「世に出わ豪傑」が容れられず、半分にはウケる筈だと思ふ。

さて、どうあらうか。

「十助と三権」

「権三と助十」は大正十五年七月の歌舞伎座初演で、主なる役割は「権三（羽左衛門）助十（左團次）家主六郎兵衛（吉右衛門）おかん（松蔦）助八（猿之助）彦三郎（壽美藏）勘太郎（鶴藏）石子伴作（八白藏）」などでした。

以上の役々いづれも好評であつた爲か、わたしの作としては上演回数が多い方で、初演以來、東京と地方を併せると毎年一回ぐらゐは何處かで上演してゐます。最近はこの五月、新宿第一劇場で我童、勘彌、段四郎、松莚等の青年俳優によつて上演され、ラヂオの中継放送もありました。

今度の浪花座で關西青年俳優一座がこれを上演することになつたのは、恐らく新宿第一劇場の成績が悪くなつたのから思ひ付いたのであらうと察してゐます。

云ふまでもなく、この戯曲二幕は大岡政談の小間物屋彦兵衛一件から生まれるもので、在來の講談や芝居でも権三と助十が大いに活躍することになつてゐます。この戯曲では、権三と助十以外に、家主や、権三の女房や、助十の弟な

岡本綺堂

ども働きます。

筋は御覽の通りで、別にむづかしい事はありませんが、演出が少しむづかしい。脚本通りに、素直にスラ〜と演つてゐれば好いのですが、見物の受けるに任せて、登場俳優も自然に巫山戯たがるやうになる。而もこれは笑劇ではないのですから、見物が如何に笑つてもそれに釣込まれてはいけない。登場俳優は普通の真面目な芝居を演ずる積りで、素直に演ずるのが好いのです。今度は山上が演出を擔當することになりましたが、どんな舞臺を見せてくれるか、そちらまで見物に行かないのが残念です。

大阪の舞臺では刺青を見せることを許されないうすから、かう云ふ芝居は困るでせう。脊中に刺青のない駕籠屋などいふものは、江戸にありません。駕籠屋に刺青は附物です。それが皆んな生白い表皮で舞臺にあらはれては、駕籠屋を主人公とする芝居だけに、かなり舞臺上の江戸氣分を毀すと思ふのですが、どうも致し方ありません。



(1)

右團次の四谷怪談

高安吸江

四谷怪談は高島家のお家藝として定評があり、殊に先代即故齋入翁の尤も得意としたものですが、彼が此れを何れから學んだかは明でありませぬ彼の實父名人小團次は默阿彌の世話物で其至藝を稱へられた外、早替などのケレンが巧かつたので非常な喝采を博したが、お岩を演つた嘉永元年に齋入はまだヤツト六歳で、母と共に大阪に居りました。漸く廿歳になつて彼は始めて江戸の父を訪れたが、襷母との

折合が悪く僅か數ヶ月の滞在で直に歸阪し、遂に藝事上是といふ薰陶を受ける機會を得ぬ中に父を喪ひました。四谷怪談書御の翌年(文政八)と天保十二年に本家の三代目菊五郎が來阪して此狂言を演じ大好評でした。恐らく當時の演出が、無論多少の變形は免がれないにしても、大體に於て其まゝ上方に残されたものと見て差支ないでしやう。かの慶應二年に中村宗十郎の伊右衛門でお岩を演じた先代延若など、四

代目菊五郎の養子になつた位ですから確に音羽家系と推定せられます。

齋入のお岩で、今私の手元にある尤も古い番附は明治三年八月の角の時ですが、彼が上方に傳はつた音羽家系演出を何の點まで採用したかは頗る疑問です。

父小團次が安政六年に四段目の由良之助を演された時、己が人品の此役に適せぬのを知つた彼は一身にも應ぜぬ由良の助は此回が勤め始めの勤め納め、申さば一世一代に大役相勤候云々の口上を出し、城明渡から居所かはりて早替の與一兵衛となり大當をとりました。

齋入はしかし此れだけでは満足せず更に與一兵衛と定九郎の早替を見せて見物を驚かせたが、此間の浪花座で右團次が演つたのが即其型です。つまり彼は其父以上に新規を好み新工風を

樂にしたのですから、お化の總元縮と云ふべきお岩などは到底在來の陳腐な演出に満足する筈もなく、特に其創作が多分に加へられたと信じてよいと思ひます。云ひ換へると高島家のお岩は齋入によつて大成されたかと考へるべきでしやう。

それなら何處に彼の創作があつたかの問題ですが、遺憾ながら私は小供の時からこうした惨虐な血腥い芝居に對して堪え難い嫌畏を感じ、最後に見た明治三十八年にはあざといケレンなどに最早感興を覺え得ぬ程の年輩でしたから、唯翁特有の粘りや濃厚、執着などを感ずる外、其苦心が那邊にあつたかを十分に飜味し得なかつたのです。今の右團次は幸に父齋入と屢々共演してゐたから、無論其型をよく理解し此れを踏襲することですしやう。しか

し先代活躍當時と違ひ糊紅使用が嚴禁されてゐる今日、お岩などいかに演じ悪いことゝ察します。

「露にしめりて日蔭に照りて磨いて見たる瑠璃のつや」と獨吟の中に鐵漿をつけ、髮を梳く、毛が抜ける。此拔毛を櫛ぐるみグツト摺むとタラ／＼と血が滴るので、ゾツとする程凄いのを、血の色なしでは實際勝手が悪からふ。しかし血を見せずしてそれ以上に凄味を出す事に成功したら、それこそ眞の名人と云ふべきで、三段早替なんかのケレンとは比較にならぬ程價値あるものです。

父ち昇以上に出やうと工夫した齋入、其齋入以上の價値ある演出に成功するやう右團次丈の努力は此の際尤も望ましいことゝ我等は心から思ふのであります。

繁華街に近く……交通至便・閑雅な和洋室！

モダン階上浴室新設

南地ホテル

南海難波新地戎橋停前

電南四一四・四四一番

— 宿 —

一 二 三
半 圓 圓

慰 半 額



(2)

右團次の四谷怪談

高谷伸

鶴屋南北の傑作といふばかりでなく歌舞伎の幽霊ものゝ代表作とせられる「四谷怪談」は偶然ひよつくり現れたものではない。

南北がこの作を世に問ふまでに「誦帶一寸徳兵衛」その他で言はず習作といふ意味の作品も出してゐたし、文政八年の中村座で「四谷怪談」として上演される時にも當時としては破天荒な宣傳法を採つて人氣を煽つたし、それ以後にもこの狂言を演ずる俳優によつ

てさまざまの工夫が加へられた。

宣傳法として有名なのは幽霊の現れる時に使ふ提灯を劇場へ運ばせて「あれは何だらう」「あの中から幽霊が現れるのだ」と好變の目をみはらせたものだった。

今度は伊右衛門の内の髪梳き、隠亡堀、蛇山の三場を上場されるやうだが原作は五幕十二場で事件の發端になる伊右衛門が殺人の犯跡を覆ふために顔皮を剥ぐ慘虐さは化政度の世紀末的な

極度の刺激性を物語るものがある。

二幕目の髮梳に於けるお岩の慘めさから物凄さに移る過程なども南北らしい技巧が思ひのまゝに驅使されてゐる。倒れた衝立の白地へ滴り落ちる鮮血の物凄さ、今日ではそんな演出が保安課から許されさうにないが、類癡期の浮世繪師の作品をそのまゝ立體的に舞臺へ浮き出させたやうな怪奇美があつた。

三幕目の隠亡堀の凄慘、板がへしの早替りの技巧なども凝つたものである。四幕目の三角屋敷は近年上演されないが、これにも獵奇的な興味がある。

大話の蛇山庵室が珍らしく雲の中に幽霊の出るのは、忠臣藏にからませた書卸しの事情を知らない人には變に見える。しかし、由来を知るものには先月の忠臣藏の大當りから「四谷怪談」への聯想はあながち無理とは思へない

江戸では音羽家の當り藝として故人梅幸などもよくやつたが、この狂言を演ず時は俗に崇りがあるといつてそれを防ぐためにお岩稻荷を勧請し、お岩様との尊稱を奉つたものである。

大阪でお岩を得意としたのは、先代右團次の齋入だった。お岩、小平、與茂七の三役を早替りしてその得意の素早さを誇つたものである。

齋入はこの長い狂言を全部を通してあまりに陰惨なために中途に気分を轉換するやうに、景事めいた夢の場を加へた。

これは島田播の美しいお岩の若き日に狩獵歸りの伊右衛門が時代な姿で棒茶釜のやうなかづらにむかばきをつけて、奴姿の秋山長兵衛を伴にして現はれ、浪漫的なクドキがよろしくあるのである。しかし、その情景が大ドロくで一變すると、夏の田園を彩つて

ゐた南瓜が目をむくので長兵衛が慌てだし、お岩の相格も變り、伊右衛門が倒れると、蛇山の場になつて、

「さては今のは夢であつたか」となるのである。この幕は三角屋敷をぬいて代りに加へたやうに記憶する。

齋入の晩年、悴の今の右團次をひきたるために、自分は宅悦に廻つたこの時が現右團次の初役のお岩かと思ふ

その後右團次の三役に巖笑の伊右衛門、大吉の宅悦と長兵衛で四谷怪談を見た。壽三郎が伊右衛門をやつたのはすつと後だった。

巖笑の時代な味も面白かつたし壽三郎の色敵も立派なものだった。

右團次の早替りは相變らず鮮かだが氣の毒なことには齋入の時代と違つて演出上の干渉もあるし見物の時代による恐怖性の減退もある。それに、家の

藝とは稱しても藝質に於て故人と異なるものがあるので、やりにくいといふことは察せられる。しかし、右團次のことは察せられる。しかし、右團次の舞臺を通じていろいろの點から、故人の藝を偲び、名作者の意圖をさぐるのも決して元ではない。今ではさうして歌舞伎を味はひ、そんな點から検討して行くより外に道はないからである。

◆私の特ダネ◆

石河 薫

先達て御申越し下さいました原稿の儀はあゝした材料の持合せが御座いませんでこの度の處は不悪思召し下さいますやう御願ひ申上げます。

嵐 珪 藏

小生不幸にして特だれと云ひ度き事にめぐり逢ふ機會を得ませず一度は特ダネを作りたいと思ひながら今日に至りました。云はゞ此れが私の特だれと申しませうか――

上演歌舞伎狂言解題

世話垣鈍文

【東道道四谷怪談(浪花座)】

この狂言は大南北の代表作でもあり、歌舞伎狂言中でも屈指の名作として、あまねく世に知られてゐる傑作狂言です。原作では五幕十一場になつて居りまして、初演は文政八年七月(百十一年前)の中村座で、與茂七、お岩、小佛小平の三役が三代目菊五郎、伊右衛門が七代目團十郎、直助権兵衛が鼻高幸四郎と云ふ歌舞伎爛熟期隨一の名トリオで上演されたのですから如何に名舞臺であつたかを想像して頂きたいものです。作者南北は大體の構想を「謎帯一寸徳兵衛」からかりて、當時世に起つた種々の犯罪からこの怪奇味を作り上げたことと云ふことです。勿論大變な大當りで三代目は生涯に九回も上演したのであります。大阪で最初上演されたのは文政九年正月(百十

年前)の角座で、三代目菊五郎が三度目に來阪したときの出し物として上演したのが最初で御座りました。此の時菊五郎は此の狂言を大阪向きに改竄し、題名も「いろは假名四谷怪談」と改めたのです。今日先代右團次(齋入)から當代の右團次に依つて上演されてゐるものは此の方の臺本の流を汲むだものと思はれます。因みに大阪初演の配役を申し上げますと、お岩、小平、與茂七の三役は菊五郎、直助権兵衛は嵐團八、伊右衛門は三代目中山新九郎で御座りました、その劇評を抄録してみますに

「お岩役産後の拵へよし、血納めの藥を呑むで苦しみ段々髪も抜け顔の形變る所誠に恐しう御座りました。三光の櫛を娘にやりたき一念にろくろく首となり屏風の内より出、欄間を傳ひ二階へ行く所、奇妙々々。夢の場振袖姿にて糸をつむぎ居る所綺麗々々。それより後いろ／＼變化する所誠に化物屋敷の如く恐れ入つた事で御座りました。(中略)逆さまに吊り上げ、手拭にてしめ、その儘上るところ凄う御座りました。」

と述べて居ります。逆さまに吊るすなどは到底今日の八釜しい檢閲ではゆるさるべくもありません。血のりを使ふことすら許されない今日です。ですから怪談劇の凄味も段々演出が六ツかしくなつて参りませう。

■近頃河原達引(神戸松竹劇場)

この狂言はお俊傳兵衛の戀愛事件を取扱つた作品ですが、解題子にはすこぶるヤツカイな作品なのです。と申すのは、京都の鳥邊山にあるお俊傳兵衛の墓面に元文二年十一月(百九十九年前)とあるに拘らず、享保八年(二百十三年前)に既に此の世を去つてゐた都一中の語り物に「お俊傳兵衛河原の心中」と云ふ淨瑠璃があつて、今以つて其の邊の關係が詳かではないのであります。従つて最初芝居とし書かれたものか操として書かれたものかも判然としない始末であります。然し實事談を脚色したものであることは色々文獻にも現れてをりまして、この男女の心中事件を取扱つた脚本も中々數多いのであります。

近頃河原達引の現行本には二種ありまして、一は天明五年五月五月初日(百五十一年前)江戸肥後座興行のもので、作者は曾川宗輔、筒川半二、奈河七五三助となつてをり、他の一本は中村重助再撰とある同年九月の刊本でこの本の卷末には天明二年(百五十四年前)道頓堀角の芝居で豊竹八重太夫が語つたものと刊行する旨が記載されてゐるので御座ります。

又一説には近松半二を作者だとする説もあるやうで御

座ります。處で此の脚本は全曲が三段に分れて居ります。が、有名な所は矢張り中之巻の堀川猿廻しの段で、此の幕で活躍する與次郎と云ふ人物もまた實在の人物で、東堀川一條下ル丹後屋佐吉と云ふ猿廻しが盲目の母親に孝養をつくして元文三年九月廿七日に其の筋から表彰されたことを仕入むだものだと傳つて居ります。貧しい暮しのうちに、相愛の若者、盲目の母、朴訥な兄を描いてよく人情の美しさを表して居る傑作で、寂しいうちにもよく一脈の情趣を感じしめる名舞臺で御座います。

■難有御江戸景清(神戸松竹劇場)

劇聖默阿彌は、生涯に四十一種のだんまりを作りましたが、これは默阿彌の處女作のだんまりとして有名なものです。天の岩戸かうヒントを得て作つたので別名「岩戸の景清」又は「岩戸のだんまり」として知られて居る狂言で關西では随分お珍らしい出しものです。初演は嘉永二年三月(八十七年前)の河原崎座で御座りました。

△右、歌舞伎細見、日本文學辭典、日本名著文庫、歌舞伎圖説に據る。

特 ダ ネ

私 の



去年の正月、歌舞伎座へ現はれたつきり、約壹年半御ぶさたを、して終ひました。

久し振りですから馬力をかけ奮闘します。

歌舞伎座は、冷房装置が十分に行き届いてるさうですから、働くのに、きつと樂だらうと思ひます。

今度の大阪行きで、一番たのしみにして居るのは都築君と梅野井君の芝居が観られる事です。

都築君は、云ふ迄もない事ですが、梅野井の躍進振りは、是非共知つて置き度いと思つてます。

現今は女優さん流行時代ですが……日本の芝居では、まだ、男の女形が必要です。

今は下積みに、されて居るが、男の女形が、復活する時代が、きつと近い將來に、ありさうに思はれます……さう云ふ意味で、梅野井君などは、自重して貰ひ度いと存じます。

まあ、あんまり、酒なんか呑まない方が好いと思ひますネ……。

私も最近、ちつとも呑まなく、なりました。

一つ頃は、天龍關と呑み明したり……二日二晩呑み續けて、二日二晩寝通したなんて亂暴をやつたり……きん盃なんて、飛んでもない曲藝を、やつて居た私もすつかり弱くなつて、壹合も呑むと、もう、逃げ出して終ふ程、節酒家に轉向しました。

呑まない方が、頭腦は好くなるようです。

酒の味の好い、大阪へ久し振りに行くのに、酒が呑めなくなつた事は残念ですが……命も惜しいですから、やむを得ません。
まあ……これなんか、私の特種ですよ。

節 酒 の 辨 梅 島 昇

の私



特ダネ

ザット二十三年前のある夏師匠(先代段四郎)の元を飛出してある一座に入つて伊勢路を巡業致しました、そして鳥羽から船で二時間目鏡島と云ふ處に参りました。先づ驚いたのは、船着場に、海女が五六十人、ズラリと並んで私たちの上陸を珍しうにみて居りました。そんな島ですから宿なんかあらう筈がなく漁師の家に泊りました。この土地は榮螺の罐詰を盛んに製造する土地なので何處の家の前にも榮螺が山の様に積まれてあり手料理で喰べました、ところが最前から私たちを物珍しうに眺めてゐた海女たちは、ヤア役者が榮螺のうんこを喰べたらアと一齊に笑ひました、笑談ぢやない……あとで、その爺さんに訊いたら、榮螺の腹は罐詰にはならないので皆な肥料にして仕舞ふんだと聞かされた。

成程、だが都會人は、あの腹を賞美するの、その明る日は初日で、出しものの題名は忘れたが、なんでも仇討物、それに岸の姫松と云ふ藝題、勿論掛け小屋で、黄淺幕一枚がバックでそれが山にも座敷にもならうと云ふ趣向。

二日目は忠臣藏、二日目は小道具や何にやらで開幕が大分遅れました。六段目の格子を作るなぞなく、忙しい、役者の方でも四段目で顔世と判官とデモ侍と早替りをする位で、如何なる一座か大が想像が付くと思ひます。尙四段目で力彌が、御意承り……と頭を下げて三法を持つて出て来てカンテラに頭を突當て、大笑を演じるなぞなんと云つても今から二十幾年前の事でもまだこの島には電氣がなかつた。そして七段目が終る頃、恰度午前三時と云ふ時間、それでも見物は一人も立たうとするものがない仕方がないので頭取がク今晚はこれ限り……と切口上を述べるとサア大變見物は總立ちとなつて九段目のない忠臣藏は見た事がないと騒ぎ始めました。なかには樂屋に暴れ込んで、どうしても九段目をやらないなら、役者を皆な海の中に叩き込む、と怒鳴り込んだ漁師もあつて私たちは、これは大變とそれから續いて九段目までやりましたら何んと夜が明けてしまいました。それで私たちは海に投込まれずほうほうの體でその土地を逃げる様にして次の土地に向ひました。

猿段川市・藏臣忠し明夜

私 の



特 ダ ネ

確か昨年の夏、浪花座公演の時だったと思ひます。暫く英氣を養つて更生の意氣潑刺として第一回公演を終へ、連日の好評に意氣揚々と第二回の蓋を開けました。その時の演し物は澤田正二郎氏當り狂言の一つ、行友さんの國定忠治の舞臺での出來事です。天神山不動の瀧であの名ゼリフ「加賀の國の住人、小松五郎義兼の鍛へた業物……」と熱を上げ、次の庚申塚を経て、山形屋の場になりました。茲でも例の大芝居で觀客を散々笑はせて、いよ／＼引込みとなりました時、當時、はん噲の傳吉に扮した田村邦男君が、小田原提灯を忠治の私に差し出す時に、大詰の松原で立廻り中その提灯を燃やす段取上提灯に石油をシミこませてあつたので、田村君どうした外みが、「へい、貸元」と云つた途端に提灯の底と上が取れた妙なトコロだけ残つた。驚ろいた傳吉君は勿論、物に動ぜぬ筈の忠治の私も思はずグワと吹き出したが最後、どうして笑ひが止まらぬ。客席からの洪水の笑ひに益々泡を喰つた田村君小聲で、「どうしませう／＼」と救ひの神を求めた格好は又珍景でした。然し大詰ではどうしても型物と云はれたその提灯を使はねばならず、止られぬ笑ひに苦しみ乍ら考へた一句「奴、後で提灯を届ける」は蓋し國定忠治劇の珍演出に違ひなかつたでせう。

それでどうやら別の提灯を使って舞臺を濟ませて幕を閉つた事は勿論です。「どうした、提灯は」とも云はれずに。

たゞさへ暑さで汗をかく時に、思はぬシクジリで冷汗三斗の思ひをさせられたこの一事件は最近での舞臺の特ダネでせう。

忍術と怪談

大澤休象

◆四ツ谷怪談は

怨靈ものゝ横綱

一口に怪談と云つても範圍が廣い。先づ、幽霊に就てお話ししよう。

人間が死んで其靈なほ此世を去らず再び形體を再現す。之れを幽鬼、亡霊、冥衆と呼ぶ。而して、念恨の爲めに形を現し危害を加へんとする者を怨霊と稱する。この説は後世に行はれたもので、すつと往古は、餓鬼又は祖父鬼と云つたものである。支那では、死者の靈悉く泰山に集るものとせられ、冥報記、旌異記、宣驗記等に死者再現の説を載せ、剪燈新話だの、搜神記などにも怪異談があらう。

日本の幽霊は、支那の鬼にあたるもので、印度の吠陀神話にもあるが、あまり古いし、西洋の惡魔、デーモン、古代埃及のセツトなど縁が薄いから省畧する。

手近の芝居怨靈ものを舉示ると、血屋敷のお菊、羽生村の累、牡丹燈籠のお露、四谷怪談のお岩など澤山あるが其中でも、四谷怪談のお岩は、マア横綱格だと私は思つてゐる。

◆幽霊のいでたち

幽霊の「いでたち」といふと強く響くが、とに角幽霊の姿、形體を調べてみると、大むかしは、幽霊でも普通のひとと眼装に變りは無く、武士は甲冑を

四谷漫談三題

大槻たもつ

(一)

伊右衛門「古い〜おい岩、おんなじ、カムフラージュするなら、へ〜此奴の様に一つエーモアたつぷりの近代型に願ひたいネ」



著し、僧尼は法衣を纏うて出たのだが近世に至つて、白衣となり、芝屋ではたいてい鼠色の裾の長いキモノであるこの裳の長いキモノが芝居のトリツクで、幽霊の脚を見せない爲めと思はれる。夫れから芝居の幽霊には女が多く男の幽霊としては、平の智盛だの、法界坊だの其他にしても野郎では一向凄味がたりない。

何と云つても、女といふやつは幽霊の仲間でも幅を利かしてゐるから可笑しなものだ。

◆なぜ幽霊に脚が無いか

日蓮上人の、十王讚歎抄に人即ち死んで三七日を過ぎ、宋帝王の廳に行かうとすると、業關と稱する關所があつて、關守の鬼がこゝに居つて、關税を徴る。亡者はすでに三途の河に於て、脱衣婆の爲めに衣を剥ぎ取られて仕舞つたから、わたす物が無いので、據る

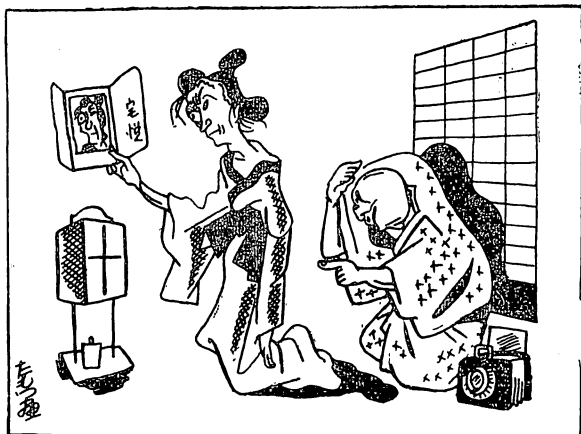
なく、手足を切つて納めるのだ。

「業の悲しさは、影の如くなる手足出来、自ら歩むともなく、業風に吹かれ兎角して宋帝王の御前に参り」とあるが、芝居の幽霊には手がある。ともに那落へ連れ行かむといふ時に、手が無いと便利が悪い。

鬼火とも知らでなつかし五月雨 曉臺

巷説に依ると、寛文の頃、江戸四谷左門町に住む同心、田宮又左衛門の娘お岩が嫉妬の爲めに身を殺し、その怨霊が失を惱ませたといふ。

四谷の左門町は、半藏門の前から麴町の通りを新宿の方に向つて、鹽町の停留所から左りへ、一丁場の停留所までの近くに、南伊賀町がある。この伊賀町は、四谷に南北二つの町があつて孰れも往昔、伊賀者即ち、忍術者が住んで居つた所であるから一寸面白い。忍術者と、お岩の怨霊との共通點を



(二)

宅悦寫真館『修正上手で評判の當店、へへ…如何ですネ、効果は？』お岩『あまり修正がすぎて一寸感じが出てないようネ。』

舉げると、双方ともに、鼠色のキモノを着てゐる事で、芝居に出る、しのびのものは、大抵、黒装束に、黒覆面であるが、本當の忍士は鼠色のキモノをきたもので、之は闇夜、忍び込む時に黒い着物より鼠色の方が目立たぬ故でお岩の幽霊も、薄くらがりの舞臺に於て、いろ／＼仕掛けのところから不意に現はれたり、スウート消え失せたりするの都合がいゝので、又、何と云つても、幽霊は夏の景物であるから皆薄着をしてゐる。これは、瘦せてゐる方が自然に帯味が出るからで相撲取の土左衛門みたいに、あまりぶく／＼肥満してゐては滑稽に見えるだらう。

忍術者がスパイに出る時に、自ら人相を變へる。若し瘦せた男になる場合には、裸體を太陽に曝して、からだに灸を据える。或は、恐い顔をして、人

をおどす時に、顔へ色々の隈どりをし、髪の毛を口に啞へる。爾ふすると一段凄慘の氣を増すものだ。

大體、幽霊といふものは、陰のものであるから、掌をうつぶせにするのは當然であり、且つ、身體の正面を見せるよりは、少し斜になつて背中を見せ、低く笑ふと一層怖く思はれる。お岩が、伊右衛門に、石地藏を抱かせてケラ／＼と笑ふあのものすごさ、四谷怪談は音羽屋の家藝で、三代四代五代目菊五郎の型が、故梅幸に傳はり、他家には、關三十郎、坂東彦三郎、市川小團次の藝風を大阪の齋入が繼承し、今の右團次に傳へたもので、其右團次が、七月の浪花座で、得意の四谷怪談お岩を演るといふから、私は大いに期待してゐる。

(三)



直助『伊右衛門君、此處らで一つ賣出の挨拶やらかすか』伊『直助君、どうも今日頼まれた店のこのネオ・サンドウキツチは感心出来ネ。今度はアド・バルーンでやりたいネ。』

大阪歌舞伎座上演

西鶴五人女

三幕

芝居物語

此の戯曲は、眞山青果氏が井原西鶴の「好色五人女」の内、樽屋おせんの物語に材を取つて、これに複雑な性格描寫を與へられたもので有ります。樽屋おせんのことば從來も劇化されて屢々舞臺に上場されましたが、此度の作では、おせんの結果まで、即ち處女時代を扱つてゐる點が誠に新鮮な印象を呼びます。おせんが樽屋庄介と夫婦になつてからの例の悲劇を御存知の御方にとつても、亦一層の興味ある一篇。

大阪天滿に名を知られた酒つく

り麴屋といふ分限者の家に女中奉公してゐるおせんは今年十九、田舎生れながら大家に居慣れて姿やさしく人品もよいので、思ひをかける男も多かつた。が、この娘は生一本の情知らずで色戀の道は振向もしない。

爰に樽屋庄介といふ者、おせんを慕ふて獨り身を焦してゐるのを見て姥ヶ池の小さき呼ばれる老婆、これは其道のしたゝか者で、策をかまへて庄介におせんを取持たうと試みた。踊の夜に小さき婆さんは生靈に合つた、それはおせ

んを戀してこがれ死にしようとする男の生靈だと言觸したので、本人のおせんは何となく心を搖られ女としての己れに目覺めて來た。

明日は朝顔眺めると前々から奉公人どもが急がしげに支度の最中小さん婆は麴屋へ現れて、また例の生靈の物語を始めた。

此家の手代久七もおせんには心を燃してゐる者で、既に小さんの結託しておせんを我物にしようとする論むやうになつた。これに反對に當人である樽屋の庄介は、小さんのあくどい手段を見て、果ては己れの心の汚なきをまで嘲はれやうかと小さんを責め罵つたが、結局は指圖通にするより他はなかつた

小さん婆はおせんに會つて、何も彼も心得た如才なきで誘ひをかけた揚句が、おせんも不圖お伊勢ささまへの拔參りを約束してしまつた。

翌朝、伏見京橋の船着場で、小さんはおせんと落合つた。庄介も

旅姿で此處へ來てゐた。小さんの心では、おせんと庄介を遣づればさせ、よい首尾を、といふ積りであつた。

その時——夜はまだすつかり明け切らず、犬や鶏の聲が遠く聲え四面は朝霧につままれてゐるが、船着場の賑はしき。河岸には提灯を持つた旅屋の客引き男、女、駄賃とりの馬方、駕籠かき等、銘々口々に叫んで客を引つてゐるなかを只今着いた夜船から降り來る船客……出家、山伏、武士、町人女などの大勢が岸に出した歩板を渡つてソロ／＼と出て來る。

岸にはそれ／＼客を呼ぶ聲「お疲れさまでござります。お休みなされませ」御風呂の用意がござります。駕籠やろ駕籠ぢや、口あけぢや、安う行きます。馬は何うちや、馬は「八石船にはまだ間がござります。お休みなされませ」朝飯の支度も丁度でござります。駕籠は何うちや、今日の大津道は暑いぞよ」その他、口々に叫んで客

を引く。馬を雇ふ者あり、駕籠に
乗る者もあつて一時に雑沓を極め
る。

すると不意におせん等と呼びか
けたのは麴屋の手代久七であつた
久七は店のかけ金を集めに行つた
歸途だ、一緒にお伊勢詣りしやう
と言出した。

氣の小さい庄介はもう諦めやう
とした。が、見るに見かれたおせ
んが一緒に待つてくれと言葉をか
けるので急に勇み立つて行を共に
する。

斯うして、小さん、おせん、久
七、庄介の四人づれは各々複雑な
氣持で道中する事になつた。

泊り／＼でも久七は主人の如
く、庄介は僕の様であつた。小さ
ん婆さんまでがいぢけた庄介を見
棄て、久七の味方をする様になつ
た。

庄介はおせんを諦めやうと努め
た。宿屋でおせんの脚絆や甲掛を
洗ふのも不甲斐ない己れの身をハ
ツキリ悟らう爲であつた。それ迄

にしても煩惱を拂ふことは出来な
かつた。

おせんはもう久七のものど定つ
た様に見えたが、流石に庄介と同
じ泊りであれば、思ひを遂げるに
は至らなかつた。

但し、伊勢の明野の原では生國
當ての比丘尼が彼等の運命を正し
く豫言した。

豪農の息子だと言ひふらしてゐ
た久七は高慢の鼻を折られた。

そしておせんには、近日中にお
目出度い話がある、迷はずに其れ
に従ひなさいと云ひ、庄介にも嬉
しい話が起ころ、と傳へたのであ
る。

しかし夢中になつた庄介の耳に
は却つてそれが嘲弄の様にさへひ
ゞくのであつた。

さて一行は無事にお伊勢詣りな
すませて京都まで戻つた。宿は麴
屋の定宿、ぬの屋といふ立派な家
である。

久七は生意氣にも主人の行きつ
けの一番上等の部屋をいひつつ

のであつた。

庄介は愈々皆と別れて東へ下る
決心を固め、いよ／＼おせんに會
つて最後の別れを告げるのであつ
た。

——急に入用が起りました。何
うか御面倒でも……。

はい／＼(立つて伏見三寸の小
葛籠より胴巻を出しつゝ)中を見
ませぬが大方の御金……、樽屋ご
の、こなたは何んぞ思案があつて
これを用意されたのではござりま
せぬか。

はい……(俯向き泣く)

女のわたしが、いらぬ差出口で
ござりますが……聞かしてかまは
ぬ事ならば何うか隠さず……。

はい……(ホロ／＼と暫く泣い
てから)おせん殿、わしは今度家
を出る時から、二度と大阪の土を
踏まれぬかも知れぬ……と思ふて
これまで稼ぎ溜めて親方様へ預け
て置きました金を、ソツクリ持つ
て出たのでござります。この包の
中が、庄介、十年の間辛抱して

稼ぎ溜めた……云はゞ、身の膏で
ござります。と本心を明し、預け
た金を受取つて去らうとした。す
ると偶然にも麴屋の主人夫婦が此
家に来てゐた。

久七はあはて、いゝ加減の言葉
でゴマかさうとしたが、中年者の
お前などは、とて主人の相手にし
なかつた。

麴屋長左衛門は庄介の切なる心
の中を知つて涙を流さんばかりに
感じ入つた。その結果、主人の金
を費ひすてた久七には罰が下り、
庄介には思ひがけない幸運、即ち
おせんとの結婚が恵まれるのであ
つた——。

主なる配役

樽屋庄助……阪東壽三郎
麴屋手代久七……市川小太夫
麴屋長左衛門……澤村田之助
小さん……藤間 房子
おせん……水谷八重子

神戸松竹劇場上演

暗闇の丑松

三幕
芝居物語

序幕 天保年間の春長けて、南風が生温く吹く宵です。江戸淺草鳥越のお熊の家からビシリと云ふ音、同時にアツと叫ぶ女の悲鳴が聞こへます。近所の人達はまたかと思ふのですが、それでも氣になるかしら、あちこちの二階の窓には、云ひ合はしたやうに氣配をうかごう人顔が見られます。

お熊の家から聞こへる物音——一寸離れにも夫婦喧嘩のやうに思はれますが、實はお熊が菱女のお米を賣めてゐるのです是には仔細があります。

お米は或る料理屋に奉公してゐたのですが、その中同じお店に働く丑松と云ふ料理職人と好い仲に

なり、お熊の許へ歸つて來てゐるのです。處がよく世間にある例で喜善の旦那と云ふ物持ちの老人がお米に目を付けて是非面倒を見たいと云つて來たのです。慾に眼のないお熊は渡りに舟と喜び、此の間中から丑松の留守を知らつてはあんな働きのない男と手を切れとさんざ口説いてゐたのですが、お米はどうしても聞き入れず、果ては手荒い折檻も繰り返へされてゐるので。今宵も亦、例に依つて例の如く、お米はお熊と、それに喜善の旦那に取り入つてゐる町のごろつき浪人、潮止徳四郎から同じやうにせめ立てられてゐたのですが、其所へお米にとつては救ひ

の神である丑松が歸つて來たのです。丑松はかかれてお米から、總ての事情を聞かされてゐましたか、案にたがはぬお熊の惨ひ仕打ちを眼の邊りにして、逆上した彼は、とうとうお熊と潮止を手にかけて了つたのです。

やゝあつて自分と云ふものを取戻した時、丑松は既に恐ろしい兇狀持ちとなつてゐる自分自身といふものを意識しなくてはならないのでした。彼は罪の恐ろしさに自殺しやうとします。然し、それは生きられる限り愛する男と一緒に生きたいと願ふお米の熱情に動かされて思ひ止められるのでした。かうして二人は兎も角も、丑松が眞實の兄とも思ひ信じてゐる四郎兵衛親方の許迄落ちのびる事になります。

二幕目 前場から一年ばかりたつてからの事です。

板橋宿の妓樓松屋と云ふのに比較的最近雇はれた遊女で、おきよと云ふ女が居ります。おきよは此の邊りの宿場に置くには、もつた

いない程の美貌の持主で、遊客仲間でも、評判になつてゐたのです。が、ごうも淋しい蔭を背負つてゐるとても云つた女で、美貌にもかゝらばらず、餘り遊女としては、賣れる方ではありませんでした。

此のおきよ——。これを丑松の女房お米に他ならないのです。

おきよが現在のやうな賤しい勤めに身を墮すまでには、次ぎのやうな物語があります。

去年の晩春、鳥越のお熊の家で一時逆上からお熊と潮止とを手にかけた丑松は、お米共々最も信頼する四郎兵衛の許を訪れ、今後身の振方を相談したのでしたが、此時四郎兵衛は、一先丑松に草鞋をはくやうに進め、お米は身に代へてまた會ふ日まで、自分が面倒を見てやると、男らしく引き受けて呉れるのでした。此爲丑松はしばらくは、とぼりのさめるまでと、はき馴れぬ旅の草鞋を重ねることになつたのですが、彼はお米の身の上に就いては、たゞ四郎兵

術を信じて、戀しいながらも安心してゐたのでした。然し四郎兵衛は丑松が信頼してゐるやうな人物ではなかつたのです。彼は丑松の留守の間にお米に向ひ、丑松には旅先でいゝ女が出来たさうだとか又は俺の云ふことをきかなくて、丑松の隠れてゐる所をお上へ訴へてやるとか、うそとおぢしの手を使つて、とうとうお米の體を汚した上、苦界にまで沈めて了つたのでした。かうして、流れ、流れた末、お米は生ける屍のやうな姿を、此の宿場にさらしてゐるのでした。或る嵐の夕。濡鼠のやうになつて、松屋に飛びこんだ一人の男があります。

それは一年餘りの旅に、江戸の空戀しく、わけても愛しき妻お米懐しく、江戸入りを急ぐ丑松でした。が、運命の神の織りなす綾の皮肉です。其夜丑松の相手として選ばれたのがおきよのお米とは——お米の驚き、嬉しさ、悲しさ……。それにもまして丑松は、意外さから愛する者に裏切られた極

度の怒りへ——と、感情のひた走りになるのを、ごうすることも出来ないものでした。今の丑松の耳には、涙と共に訴へるあはれなお米の言葉も、素直には受け容れないのでした『あんなにまで愛してゐたのに』と思へば思ふ程、彼には泣きたい氣持ちになつて來るのでした。此際もう少し二人だけゐる事が出来れば、次第に激情の鎮まるにつれて、互ひの不運な境遇や、現在に至るまでの道程に就いても理解し合ふ事も出来たかも知れませんが、運命はそれを許さず、次から次へと、二人にさつてはなんの用もない人物が飛びこんで來てはゆつくり話し合ふ事も出来ないものでした。

お米として見れば、自分の眞實が分つて貰へるまで話したかつたでせう。然し既に總てを想ひあきらめた彼女は、死を以て丑松に詫びやうと、此場を去るのでした。後で丑松は、此の家の若い衆三吉からお米の悲しい数々の身の上話を聞かされ、やうやく今までと

は違つた感情でお米を考へるやうになるのでした。此時はもう遅いのでした。お米は嵐の中を、庭の銀杏の太木に首をかけて、死の旅へ立つてゐるのでした。これを知つた丑松は、思はず其場へ駆けつやうとしますが、逃走者といふ自分を意識した彼は、大雨の中を一散に闇に姿を隠して了ひます。胸は四郎兵衛に對する復讐の念で燃へ立ちながら——。

大詰 江戸深川の料理人の部屋を經營してゐる四郎兵衛は、丑松が人殺しをして高飛びした時から較べて、僅かな間に又一つ、部屋の貫録を上げておます。

夜來の雨は名残りなく晴れて清々しい氣の漂ふ朝、四郎兵衛が朝湯に出かけた後に、ひよつくり姿を見せたのは丑松です。

四郎兵衛の妻お今は、此の思ひもかけぬ丑松の出現に驚く——と云ふよりも彼の顔、素振から、たゞならぬ、何か自分達に迫るものゝあるのを感じて、ハツとなるのでしたが、それも其筈です。丑松

が此所へ姿を見せるほんの少し前に、板橋から米の死を告げられて居たからです。

お今は丑松を見た瞬間に、四郎兵衛に復讐に來たのだと直感するのでした。次いで自分も亦其の難を逃れる事は出来ないと思つたお今は、夫四郎兵衛を救ふと共に自分自身も亦助りたい一心から、自身を丑松に任せやうと決心するのでした。そして『うちの人に敵討は、それが一チいゝんだよ』と憐みを乞ふ眼ざして丑松を見るのでした。彼にはお今のそうす心中が見へすくのでした。女つても、心はさうなだらう。亭主も助きたい、うぬも助きたい、で怖い男に體を投げ出す——『お米も矢張りこの傳だつたんだ』と叫ぶがいなや、お今を其場に絞め殺す。

其後間もなく、松の湯では大驚ぎが起りました。それは四郎兵衛が何者かに、横ッ腹を抉られて、湯槽の中で死んでゐたからです。下手人は云ふまでもなく、丑松です。

壽三郎と八重子と

桂田 曉香



壽三郎氏は、其演技の上から見ると、非常に落付きのある人に思はれる。

そして何處が不器用にさえ見えるのである。

目から鼻へぬけるやうに人達ばかり多い劇壇には珍しい存在である。

全く現今の劇壇は、あまりにこせ／＼しすぎて居る。高いところから、大きい眼で物を見る——と云つた人がすくなすぎる。

従つて、芝居そのものが箱庭式に、せ／＼こましく纏まつてしまつてゐて、廣々とした氣持ちで見られる芝居と云ふものが少い。

壽三郎氏の如き、落付きのある大きい芝居をする人が、廳では劇壇を背負つて起つ時代が来るんぢやないか知ら此の今迄の足跡として、第一劇場の仕事など意義があつた。

今でも私は、もう一遍野淵氏と組ましたいと思つてゐる。

壽三郎氏もあの時代から見ると、大分變つて居る。

藝に氣品と云ふものが出来て来た。

私は關西の人で、一番望みをかけ、將來を見守りたいと思ふ人は壽三郎氏で、氏が、今度水谷八重子と組んで七月の歌舞伎座を開けると云ふ事に就いて、一等興味を

ウキスデキ
 プラモンツ
 ベルモット
 キュラミ
 ベーバ
 ジベキ
 滋養葡萄酒

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品
 國産金鶴印



元 山 商 店
 發 賣 會 社
 株式

大阪市東區豊後町三番地

電話東(94) 一六六二
 二〇一
 四六四九

持つのは、八重子が、今迄の井上正夫とのコンビを解消し、新しく壽三郎と組んで、どんな効果があるかと云ふ事である。

其處には、何となく濼測としたものが感じられる。少し萬年娘になりかゝつた八重子が、新鮮に、力一杯の藝を見せて呉れるやうにも思はれる。

いゝものでも、あまり度々では、見た眼に變化がなく、處も何處かへ姿をかくしてしまふ。

顔觸れが變ると、又いろくゝに興味が湧く。

○

水谷八重子も、なか／＼賢い人で、何をやらしても相當に演る、

それが時には福ひして、飛んでもない役を振あてられたりする事もあるが、何と云つても藝術座を背負つてたつてゐるだけに、いゝところのものを多分に持つてゐる。それに今度の顔觸れが、小太夫だの、梅島だの、舊帝劇の女優さん達と云つた珍らしい連中である。相當面白

いものであり、充分期待出来る。

壽三郎と八重子が組んで、其處に新しい道が、拓けて來た事を兩優のために祝福してやまない。

漫談

俳優なりせば……

花月亭九里丸

どこを押して私が俳優に……

恁んな答がこの顔の持主である、寡なくとも社會に鏡の存在を知つて居る私が、餘程の精神病者で無い限りは答へられますかいな、しやうむない。

假りに私が眞面目で、本當に座り直つて、冗談抜きで、

「私が俳優だつたら、上方の雀右衛門さんであり、東京の梅幸さんの藝で

身を立てます」と、云つて御覽、屹度

「阿呆やなア、彼奴氣狂やぜ」

と、嘲笑されるに定つてます。そして次に出る言葉が

「お前の顔ならマア、蝶六か箱登羅が關の山や」

此の點蝶六さん！腹を立てんといとくなはれや、箱登羅さん！、悪く思はないで下さいよ。

これで平素思つて居ります。何かの場私には平素思つて居ります。何かの場

合失禮ですけれど、落語家芝居の如き不眞面目なものでなくして、現在の自分の職業の立場を離れて、一流の職業

俳優と伍してこの顔にタイトルを張つた時に、野崎村のお光、毛谷村のお園、辰り橋の小百合、太十の操を「笑はずに、笑はさずに、」絶對大眞面目で一生懸命にやつて見度いものであります九里丸精神翼なし……誰や？、氣附薬が必要だと、黙つとをれ……、無禮者奴。

立役は好かないです、でも亦、興行者側から營業政策上、どうしても立役をとの御註文なれば、紙治を初め、封印切りの忠兵衛、それとも與三郎か辰五郎位ならお受してもよいと思ひます所で、すね、俳優としての私の考へでは、……モウ一等俳優となつたやうな申分ですが大に花柳界を迎合したいのです、阪口おどり、失禮々々、「あしべ踊」を歌舞伎座で上演する以上に我々俳優は花柳界と進んでタイアップの必要を感じるのであります、誰やら

への當て附でなし。

誰かが云ふ、俳優と藝妓は猫に鯉節やと、よう云わんわ、そんな浮いた問題ぢやないですゾ。

現在では山緒を誇り、傳統を尊ぶ我歌舞伎界でも、正に非常時の危機に遭遇して居ります。一面花柳界にも、カフェーなる異端者が偉大なる勢力を保持して挑戦して来て、渺からざる脅威を感じさせて居る、これも非常時です。

我々は何も新らしがり屋のモガに冷罵を浴びせるのぢやありませんが、ペイトベンがどうの、ニジスキーがどうのと解りもしない洋樂の半可適な、齒の浮くやうな鋸の目立聲を叫んで獨唱とかを禮讚する、小便臭い子供に

「今更いふも愚痴ながら、悟る御身に違ひは、蓮の浮氣や一寸惚れ浮いた心ちやムんせぬ」とか

「忽體ない事ながら観客様をかこつけに逢ひに來たやら南やら」が、解つ

てたまりますものかい。如何程私達も舞臺で目をむいたり、足を鳴したりしても、それに理解の持たぬ者には、それこそ猫に小判で、

「娘十六——こひごころ——」

を欣んで居る方が性に合つてますよ、南禪寺瓢亭の料理に水臭いと恕つて、二十五錢のカレーライスに、ソースをざく／＼掛けて欣んで居るインチキ紳士がフン反りかへる御時世ですやおまへんか。

そこで互に理解した、芝居と色衝が提携し合ふ、それは恰度牛肉のすき焼に葱であり、まぐろの刺身にわさびでありたいのです。芝居と色衝、そのどつちかが牛肉で、どつちかが葱、それがタイアツプですよ。ある時は芝居が葱で、色衝が牛肉であつたり、ある時は芝居が牛肉であつて色衝が葱になる場合も……。

シリウタオネはに 絛結

… 科病柳花 …

院医原藤

★ 番六三六二戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネはに 絛結



静間小次郎氏と語る

菱田正男

そのかみの新派劇界華やかだった頃、劇界に名聲を謳はれた静間小次郎氏が、今なほ健在で、目下松竹京都下加茂スタヂオに勤務しつゝあることを知った京都の好劇家連の集まりである「紫明會」が一夜發案したのが、氏を引っぱり出して「モノを聞く會」をやらうといふことだった。そして、ついこの間のある一日、その會を猪熊出水の萬龜樓で開いたところ『モノ聞こう』とて集まつた連中は約卅名にちかく、醫者あり、畫家あり、新聞記者あり、劇評家あり、なか／＼の芝居好きが顔をならべたのである。

ところで、當の静岡氏は、おそらく面喰らつただらうと思はれる。「何を好んで、いまさら、この俺に物申さうとするのかしら」テナ怪訝な氣持もありはしなかつたと察しられる位突然の思ひつきだったか、喜んで出席してくれた。

面と向へばすでに齡七十に近いだけに頭髮も白く、どこかに

往年の飛將軍の佛ありとはいへ「静間氏も年をとつたなア」としみ／＼思はされた。

さて席につけば満更知らぬ仲でもない連中ばかりとて、ワイシヨ／＼としやべり出す。お互ひに思ひ／＼に饒舌つたつてオモシロクもないから、氏を机の前に座らせて、本格的に一場の講演をさせやうといふことになり、酒宴中ばで、にはかに席の眞中に大きな机を持ち出し、その前にテンと座らせて「新派劇界昔噺」の一くさり拜聴と來た——

こうなると静間氏たるもの、大いに回顧談を語らうとばかり「エヘン」と咳ばらひもお定まりに、日記の拔萃を前にそも／＼俳優になりたてたから、その頃の劇界の推移、珍談などなか／＼名調子で語り出した。聞く方も大いに敬意を表して、目前の料理と静間氏の顔を七分三分に睨めつくらしながら「フム／＼」と謹聽の幾時かゞ経つ。

あんまり立てつゞけでは演者も氣の毒とあつて『中休み』があり、ひきつゞいてしやべつてもらつたが、非常に面白かつたその話のうちのいくつかを拾ふてみる。

『明治卅三年の春、京都南座で十三日間興行をやりましたが客が十人も来ず散々な眼に遭ひました。この時、大谷さんに見込まれて京都の當時の常盤座へ出て、新聞連載小説の劇化で約一年ほど好評でした。その時分二十幾歳の太谷さんは『何とかして俺は日本一の仕打ちになりたい』といつてゐられたが、今日の成功を思ひますと感慨無量です』

と、青年の頃大きな志を抱いて劇界に乗出した大谷さんの氣持がわかる。次の興行の『手つけ』だとして静間氏に大谷さんが百圓(いまの千圓位)を渡した太ッ腹さもおもしろい。

『私に(火事男)だとか(不動)(火の玉)なんて結名のついたのは、明治卅四年六月五日の京都常盤座の水事以來であつた。時には大事なものスツカリ灰にし、おまけに座員一人半焼死の厄に遭ひ東山病院に入れるので醫者と大喧嘩しました』
元氣な若い頃の氏の風貌が偲ばれる。こゝで白井さんに千圓借金して證文を入れたことなどなか／＼正直に徴に入り、細を穿つての話。

『京都一演劇改良會』の出來たのは明治卅五年二月でした。會長は故人の高木文平氏、名譽顧問は織田大學教授、島華水

高安月郊、中川霞城、中山白峰の諸氏三十一名、名譽評議員に内貴基三郎、雨森菊太郎氏ら十九名で、脚本の選擇、時間の短縮、劇場内の飲食物の取締、役者の操行調査などを眼目にやり、随分下の人たちに憎まれ、大谷さんの強氣の蔭にかくれて恐々ながらやりましたよ』

と、その頃のうるさかつたことを思ひ出して大笑ひ。

『私は生れつき非常な肝癩持ちでして、京都の歌舞伎座で、『巖窟王』が出た時、大谷さんと道具のことから口論しまして

カツとなつた私は『馬鹿にするなッ』とばかり、頭取部屋にあつたグラ／＼と沸え立つてゐた大きな藥罐を引つさげで大谷さんに投げつけやうとして皆に止められました。後で我に戻り『これをほんまに投げたら……』と思ふとゾツとして早速翌日詫まりに行きますと『あんなこと位はあり勝たよ』と

事もなげに言はれて『この人大した度胸だ』と感心しました。亂暴者だつた氏の若いころの話、今の俳優にこんな元氣な者が

あるかしら、話はそれから變裝競争やら、女形の思ひ出、現存の俳優との珍談など出たが、さすがに艶種ばかりは、イトモ涼しい顔で中さぬ、この道にかけてもなか／＼の氏だけに出席會員連盛んに攻め立てたが、ニヤ／＼笑つてとり合はなかつたところ流石古強者だけあると變なところ感心して會を閉ぢたが近頃にない愉快で有意義な催しではあつた。

大阪歌舞伎座上演

女 一 代

六 幕 芝居物語

京都の大學に通つてゐる伊佐大助には、お雪といふ愛人があつた。お雪は彼が下宿してゐた女髪結米山あきの家の内弟子である。伊佐は純情で美しいお雪を愛してゐた。お雪も眞面目で男らしい伊佐を愛してゐた。二人は十七日——其日はお雪の休み日である——を待ちかゝれて二人だけの世界を樂んでゐた。

或日は比叡山へ登つた。そして二人はどうしても結婚するのだと言合つた。山の上から京都や大津の神佛に嬉しい願ひを捧げもした。自分の様な無教育な女が立派な紳士の妻になるなんて身のほど知らずだ、さう卑下しつゝも、お雪の心は喜びの日を待たずにはゐられ

なかつた。

突然に伊佐は悲しい通知を受取つて驚いた。それは父の死である。彼は何にも知らないで學業を續けてゐたのだが父は經濟的に非常な苦境に立つてゐた。それを我子の爲にかくして毎月送金をしてゐたのだつた。伊佐は父に死なれて始めて親の有難さが身に沁みた。と同時に彼は途方にくれた。己れの家に残るものは借財ばかりであつた。毎日就職口を探して歩いたが在學中の身では到底幸福な話に出會すことは出来ないであつた。彼を泊めてゐる女髪結の米山あきは心から伊佐の身を案じてゐた。此まゝ學業を廢めさせるのは如何にも氣の毒だと思つたし、もう一

つは娘の千鶴子が伊佐を好いてゐる事を察してゐた。で、彼女は伊佐に對して、千鶴子の婿になるといふ條件の下に彼の學費を出させて貰ひたい、斯ういふ相談をかけたのであつた。伊佐は固より拒るつもりであつたが、此の話を お雪 が聞いて了つた。千鶴子は恩義を受けた師匠の娘である。また伊佐が學業を續ける爲には千鶴子との結婚より他の方法は無いと信じた千鶴子は女學校をも出てゐるし伊佐の妻として自分より遙かに適しいと考へた。自分が一身を犠牲にして身を退けばみんなが幸福になれるんだと思案した——そしてお雪は他家へ嫁ぐといふ名目で或日米山あきの家を出て行つた。

『長い間、御親切にして下さいまして有難うございました。御恩は一生忘れません。私は此度急に嫁入することになりました。お目にかゝらずに此のまゝ行くことをどうかお許し下さいませ。では御身御大切に御勉強して下さいませ。さうお願ひいたします。ではお

別れをいたします。ゆきより。伊佐様——彼女はこんな手紙を愛人である大助に残して去つたのである。

大助は大いに憤慨したが、結局あきの申入れを承知して千鶴子と結婚する事にした。間もなく、あきは病死し、大助と千鶴子は平和な生活を送つた。

所が或日、大助はあきの墓參に行つてゆくりなくもお雪と會つた。お雪は友達のおとめの家にゐた。そして彼女は大助との愛の結晶である赤子を抱いて苦勞してゐる、といふ事を同行のおとめから聞かされて何とも云へない氣持になつた。數日後、彼はお雪を訪れ其の男の兒を自分の子として育てやうと提議した。

お雪としては、生みの子を手離すのは何よりも辛かつたが、我子を父なし子とするのは其れにしても、悲しいことであつた。大助にしても、其子を引取ることは相當むづかしいとは考へてゐた。が、お雪の身を思ひ己れの責任を考へるとき萬一の場合は千鶴子と別れて

忘恩の徒と云はれても我子を引取るのが自分の義務だと信じたのである。夫から子供の話を聞いた千鶴子は、喜んで其子を引取る、但し本當の親として育てる爲に生みの母の名前は知りたくない、と云つた。よもやお雪の子供だとは千鶴子は夢にも考へなかつた——。かくて幼児は大助夫妻の子供として、あたゝかい家庭の愛撫の中に育てられる事になつた。

十何年経つた

大助は静岡縣廳に勤めて立派な官吏になつた。お雪が生んだ男の兒は良一と名付けられ、もう中學へ上る年になつてゐた。そして良一には文代といふ妹もあつた。これは勿論大助と千鶴子との間に生れたのである。一方お雪は東京美容院で修業した結果が、今では丸ビルにアイリス美容院といふのを自ら經營してゐた。

アイリス美容院は評判の家で、端麗な其美容室には數人の美しい弟子達が何時も忙しげに手先を動かしてゐた。また美貌のお雪が獨身生活を堅く守つてゐる事は九ビ

ル七不思議の一つだなども云はれてゐた。或日、偶然にも丸ビルで大助とお雪は邂逅した。お雪が今まで己れに操を立てゝゐた事を知つて大助は心から感激した。そして、また昔の戀情を蘇へらせた二人であつた。大助は行政上の用向きで月に一度ぐらゐる上京する、其度に必ずお雪と逢ふやうになつた。

また十年ほど経つた。

大助は今や静岡縣の知事であつた。彼の娘文代は竹之澤子爵の令息敬文と婚約した。敬文は元々良一の親友なのである。

大助は相變らずお雪と誼みを通じてゐたが、其頃縣では發電所と農民の間に紛争が起り、彼は知事として其事件を圓滿に解決すべく奔走、東京へ出る機會も多くなつた爲に自然と心身の疲勞をお雪の家で癒すことが多くなつた。或野も富ヶ谷にあるお雪の家で慰めを求め、戻らうとする時に心なき新開社の寫眞班は、彼の姿を送り出してお雪と共にカメラに納めてしまつた。

その新聞を見た静岡縣の農民達は激昂して、我々の死活に關する重大問題を調停する責任を帯びながら妄狂ひに日を送るとは何事であるか、と私邸の門前にまで押かけて彼を罵り、その自決を迫るのであつた。大助は、紛争中の問題に付ては飽迄も盡力してゐる。若しこれが不幸な結果に終つたならば自決するが、新聞に載つた女は斷じて妾ではない——毅然たる態度を持してゐたが、意地悪い『輿論』は仲々その攻撃の手をゆるめなかつた。そして名譽を重んずる竹之澤子爵は敬文と文代との婚約解消を申込んで來たので、大助の一家は急に暗雲に閉されてしまつた。或時、大助は千鶴子に向つてお雪との一切の關係を告白した。千鶴子は驚いたけれども、お雪を憎む氣持にはなれなかつた。彼女は却つてお雪を不憫にさへ思つたしかし、此場合に自分達を不名譽から救ふべき思案は、大助も千鶴子も考へ得られなかつた。

此問題について切實に心を傷めたのは良一と文代の兄妹である。中には良一は妹の悲嘆を見てゐるに忍びないので、何とかして敬文と妹を幸福に結びつける事が兄としての己れの義務だと信じてゐた。それには父の妾といふ女に會つて全然關係を斷つやうに頼んで見やう、その思はしい風聞さへなくなれば、みんな元通り幸福になる、さう決心して或る日良一はお雪の家を訪れた。その女が己れの生みの母だとも知らぬ彼は幸か不幸か其日、お雪は新聞記者の來訪に會つて、漸く彼等をかへすと、思ひがけなく尋ねて來た大助とこれからの處置を相談しやうとする所へ、また訪れの聲が聞える。それは良一であつた。大助は次の間へ妾をかくした。始めて見る吾子、立派に成人した生みの子に會つてお雪の心は感慨無量の思ひにふるへた。良一の頼みを承諾して今後は伊佐と他人になる事を誓つたのは勿論である。良一は心から感謝して歸つて行つた。

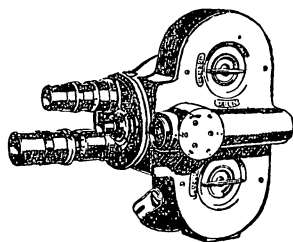
その後を何時までも彼女は見送つてゐた。そして大助が濟まないといつて手をとつて彼女は云ふのであつた。あたしは矢張り一人ぼつちに生れつてゐたのです……

の葱竈りは男の心持が取付いてゐるので眉毛を書き、道成寺の蛇體の女精として眉毛を書かないなども、一つの定めになつてゐることです。一體尾上家では幽霊や化物の顔の拵へをするのを決して人様に見せない事になつてゐて、出来上ると舞臺まで浴衣を冠つて行くのが例で、私もお岩様を勤めるときにはさうしてをります。(梅幸夜話より)

その二 五代目の巻

髪の毛の抜ける仕掛は祖父さんが初めて工夫したもので、これはかもしを解いてその毛を一本宛針へ通して羽二重へ植えるので、是れは祖父さんの内儀の役としてゐたので御座います。其の後かづらは今の様に羽二重張りになりましたが、それまではみなミハと申しまして生え際などは餘程形が悪う御座りました。髪すき場で用ひられる衝立は白地に秋草と月が書いてゐるものに定つて居りまして其の上に血が垂れるのですから、一層凄く見えるので御座ります。お岩様の顔の變るのは半面かづら(右の眼の下まで)に附いてゐるので、夫れを冠るので御座ります。(自傳より)

フィルム



十六ミリ界の最高峰

未だ曾てフィルムカメラで影して失敗があつたか？
未だ曾てフィルムカメラで一呎のフィルムが浪費されたか？フィルムは映畫になると同時に最も優秀なるカメラマンを兼ねボタンを押し給へ貴下になされる事は唯それだけだ

(全一國流メカラ店にあカリダグロ進呈)
BELL & HOWELL CO. U. S. A

× × × 六 月 の 芝 居 々 々

西尾福三郎

書入れの忠臣蔵が獨蓼湯の靈能を發揮したのか、それとも歌舞伎の若手連が春眠より醒めて潑刺された夏の戦陣に躍り出した意氣が大衆に迎へられたのか、ともかくも六月の浪花座は一昨年前進座が掛つた時以來の記録的な大入りで赤白の千軒幟が景氣よく立ち並ぶと云つた盛況である。筆者等がかね／＼提稱してゐた關西青年歌舞伎の大同團體の前提として、これは幸先きのよい福音である。この點御同慶に堪へない次第と深くお喜びを申上げておく。

三四の花形役者を除いては、從來餘り注意されなかつた程度の人達が寄り合つて、ともかくもこれだけの興行成績を擧げ得たと云ふ

目前の事實に對して他の友軍たる局外の若手連に大いに考へてほしい所がある。それと共に一座の人達に向つてもこの際更らに一考を煩はしたい點が尠らず見出されるそれは追々と述べる事として、先づ第一に全體の演技に統一性のない事と、次に若手と云ふのに皆割合にうるほひの乏しい事、云ひかへると歌舞伎的なお色氣やお愛嬌が今少し豊富にあつてほしい事だこの事を委しく書くには紙敷が許されないから以下劇評に移る事として、全段の内お輕勘平の條りを忠實に演じた事は忠臣蔵と云ふ狂言を正當に觀賞させやうとする尤も良い方法であつた。

この意味で、三段目の文遣ひから出したのは親切であり、更らに五段目六段目の楷書風な演じ方も役者の爲又見物業の爲に兩つ乍ら

の勉強芝居として有意義であつた儲けてゐるのは霞仙で、直義、藥師寺には注文したい節もあるが、六段目の勘平は將に力演である。一本調子の人なので後段や、持ちきれない點があり、ともすれば宗十郎の悪い所に似た面影がちらつく。

宗十郎と云つても末廣家ではなく私の云ふのは紀の國家である。六段目がよければその忠臣蔵は先づ／＼させなければならぬ。お輕もおかやも、二人侍も、源六、お才もその他氣を入れてやつてゐた。その外で印象に残つたのは右團次の五段目だ。

本格的な五段目の演出から云へば論外だが、こんなのは今の内に見ておかないとやがて檜舞臺では見られなくなつてしまふであらう。

錦吾のお軽も七段目でウンと氣張つてゐて、吉三郎の平右衛門と兄たり難く弟たり難き出来、名前はお軽だが、この一座にとつて仲々重い存在である。秀郎の師直は手堅い。手堅過ぎて色氣まで封じたのは錦吾のお軽にも感じた所だが、その他の二枚目所押しなべてこの憾あるのは青年歌舞伎らしくもない。

生地と藝とをこゝらで渾和させてはしいのは前にも書いた通りである。それから見物席をみてゐると意外な所でお手が鳴つたりするが、これから考へてみてもこの一座が今後見物教育と云ふ意味からでも、せいゝ筋の立つた面白いものを提供して、大いに將來の觀客層を誘導擴大せしめる爲に存在の意義がある事を痛感した。

思ひきつて云へば、今回は一座

の熱演もさる事乍ら、別に忠臣蔵と云ふ作品そのものゝ力で人氣を獲得した點が無いとは云へない。期待するのは第二回目以後の公演だ。本當の闘ひはこれからだ。敢て門出の第一印象をお座なりのに褒めて許り居ない筆者の眞意を知つて戴けるならば幸甚である。

小林一三氏の宣傳とかい花柳界を鼎沸させてゐる折から、今月歌舞伎座の膳立てが三つとも花柳界と交渉をもつた作品である點が興味深い。

花柳劇とは云へない迄もそれに近いものであり、従つて何れも流行の小唄趣味をふんだんに取入れて獨特の情緒を形造つてゐる所も例によつて新派の特色を充分に見せてゐる。

あく迄今日的である事が新派の價

値であるが、しかし私は中でも古い稽古扇に最大の満足を感じた。先年中座で演じた喜多村河合のにどり江と共に無條件で新派の誇るべき藝の艶光りを満喫させて貰つた。

かうした定石詰めも悪くはないが、稀にはもつと野心的なものが見たい。

七月の東京では坊つちやんを演るさうだが、大阪で坊つちやんをやるのは猿之助か新派か何れが先になるだらうか興味の多い宿題である。

本誌の年極め御購讀をおすゝめします。

一ケ年

3圓30錢

劇 評 × × ×

× × × 六月の芝居から

關西歌舞伎を

どう活かすか

大橋孝一郎

關西歌舞伎を隆盛に導く方法が、俳優達に激勵の言葉を與へることだとのみ思つて居られる方があれば、それは間違つてゐると云つてもよい。凡そ現在の興行制度から察してみに俳優よりも擧る仕打ち(松竹)が芝居をしてゐると云つた感じの方が深い様だ。俳優は只仕打の命する儘に動いてゐると云つた具合である。前號の關西歌舞伎鞭撻特輯號を見て殆ど此の點に觸れて居られた方が尠なかつた様である。俳優達への激勵文、それも結構である。而し、そんなことは今迄に幾十遍ともなく彼等の耳に這入り盡してゐて百も二百も承知のことと思ふ。そんなことよりも我々は直接仕打ち(松竹)に對して色々案を提示し或ひは相談を持ちかけた方が近道ではないかと考へるのである。乃ち私は僭越乍ら此處に筆を採つて一案を提示することにした次第である。

A、關西歌舞伎の萎靡した原因

(イ) 今日までの上方劇壇は餘りにも鷹治郎中心主義の興行政策に禍ひされて來た。(中略)彼のみを見せんが爲の芝居が如何に他の俳優達の演技を力弱いものにしたらうか。(寛小石氏)

(ロ) 總じて關西のお客さんより東京のそれの方が文化的に一日の長がある。關西では多少お目まだるい芝居をして、お客さんは何も言はずに觀て呉れる。(近江八郎氏)

右の二項が萎靡した原因として擧げ得るもので、(イ)の結果は仁左衛門を東京に去らしめた事を筆頭に道頓堀から如何に多くの俳優を去らしめたか。(ロ)の原因は過去の原因で現在では追々と東西文化の程度は平均を保たんものと向上の道を辿りつゝある事は事實で、觀客層は確かに向上しつゝある。

B、どうして活かすか

競争のない所に進歩はない。乃ち敵を作ることが肝要だ。東京の例を引くと、菊五郎に對抗して吉右衛門、左團次の一派があり、青年派では新宿の第一劇場に據る青年歌舞伎に對して前進座あり、新派に於ても、河合喜多村派に對して、水谷一派のある等、毎月錦を削つてゐるのである。

關西歌舞伎も各派に分つて競争場裡に立たしめることが必要

以上の必要である。

今の大坂歌舞伎の俳優を二分三分して芝居をさせるのだ。例へば梅玉魁車を中心とした一派、延若を中心とした一派、或ひは成太郎霞仙又は長三郎扇雀らと云つた風にして、しつかりした演出家を配し……(西田眞三郎氏)

これは大賛成である。この一例を左に示せば

★(イ)組 梅玉、魁車、壽三郎一派

(ロ)組 延若、延三郎、福助一派

(ハ)組……遊軍として各月交代に加入出演する組

(一)組 長三郎、扇雀一派

(二)組 右圍次一派

★上演狂言の特徴

イ組は新作に力点を置き、

ロ組は歌舞伎狂言に力点を置く。

年に三度は全關西合同で頑張る。(二月、四月、十月)最後に如何なる夏枯れ月でも歌舞伎の看板を道頓堀から消さない事。

○、新人の登場を俟つ。

演出に脚本に新人を登用せらるゝことも一策である。従來の新作は概ね新作とは名ばかりで、何の主張も個性もないものが多かった。此の點是非一考を願ひたい。今日の觀客の期待してゐる新作は、そんなまどろっこしい新作ではない筈だ。今度松竹から(新劇壇)なる雑誌が刊行されて新人登場の機を與へ様と云ふ。眞とに時機を得た結構な企てと申さねばならない。願くは龍頭蛇尾に終らないことをお願ひします。

古典復活も結構ですが古い演出を御承知の先生方の御盡力を期待すると同時に各俳優の持味を活かすことに終始專念して頂きたいこと。

以上で眞に散漫ながら、「どう活すか」と云ふ對策の一例を述べて見た。かう云つたことはやゝもすれだ生意氣に思はれ易いことなので後ろめいた氣持もするが、一途に思ひつめる純眞きの發露とお目こぼしを願ひたいと思ふ。(六月廿一日)

關西歌舞伎を

どう活すかか

新派の御曹子連が

『未明座』を組織

新派の御曹子連が岡田八千代女史

を顧問とし喜多村、河合、井上、

花柳、小堀等が演技指導をなし研

究劇團『未明座』を組織した。同

人のメンバーは

市川紅梅、花柳喜章、河合明石

藤井昇、河合榮二郎、小堀彰夫

小山内喬の七名で

第一回公演は七月二十九、三十兩

日(二十九日マチネー晝夜二回)仁

壽講堂に開演、出し物は

第一岡田頑子作、伊藤基彦演出

『愛痴』三幕、第二上野一雄作、

田村武敦演出『憎らしい男』二幕

三場、第三種口一葉作、岡田八

千代脚色演出『たけくらへ』三幕

尙文藝部には笠原俊、田村武敦

上野一雄、後藤武雄、經營部は

内村新太郎、平田稔彦の諸氏擔

當。

角座の『警官決死隊』

角座辻野良一奮闘劇は『警官決死

隊』十景を上場これは警察プロツ

クの解説、新設された特別警察隊

の點検、左翼の街頭連絡と私刑、

アヂトを襲ふ警官決死隊等々、未

上演の部分が多々あり、これが演

出にも非常な苦心をなし種々當局

の指導を受けたが殊にこの劇大詰

のモデルとなつてゐる和歌山事件

には強行犯係長越智氏が直接その

涉に當り負傷までした人で、指紋

検出の實驗、警察プロツクの非常

手配等、非常に救はる所が多く、

制服、帽子、佩劍各三十、特別警

羅隊用短劍、腕章各二十三、捕繩

十五、その他附屬物一式を特別な

當局の便宜により借り出す事が出

來た。

一 麴屋長左衛門

澤村田之助

一 幡間平谷作

村田正雄

一 村人庄太僧夫

大東鬼誠

一 乗かけ馬の馬一乙子

山中團九郎

一 見物の男客

藤間廣一

一 雪雄士

池田靖峰

一 旅籠屋の客引

吉田豊作

一 百箇姓の案内

武村新

一 伊魚屋大榮五助郎

梅島昇

浪花座歌舞伎總配役

浪花座關西歌舞伎總配役

女房お岩、お岩の亡靈、小佛小平、小平の亡靈、佐藤與茂七(右團次) 駒澤次郎左衛門、小猿七之助、按摩毛悦(霞仙)、奴關助 石子伴作(狂藏)、後家お弓、權三女房おかん(鶴之丞)、願人坊主願哲(實三郎)、直助權兵衛、駕籠かき助八(秀郎)、秋山長兵衛、願人坊主雲哲(美鷹)、下女

おなべ、利倉屋嘉助(若鷹)、乳母お牧、猿廻し與助(卯之助)、戎屋徳右衛門、左官屋勘太郎(奥山)、民谷伊右衛門、駕籠かき權三(吉三郎)、女盲人朝顔、駕籠かき助十(錦吾)、曾我五郎時致(延之助)、中藤淵川、小間物屋彦三郎(成太郎)、大磯の遊君舞鶴(延二郎)、岩代多喜太、家主六郎兵衛(段猿)。

T.S.S.Kの

『大劇』公演

昨年六月、最初の關西公演を歌舞伎座に行つて以來滿一ヶ年、二度目の大阪公演を、七月の大阪劇場に開くことゝなつた待望の東京松竹少女歌劇は、ターキー・オリエ以下總勢百三十三名を擧げて西下豫定の如く、七月十二日初日を開

けるが、演し物は目下東京公演に於いて大入満員を續けつゝあるグランド・レビュー『ローズ・マリー』全十六場で、これはSSK近來での大當りレビューだ。尙一行は七月九日來阪十一日舞臺稽古の豫定である。

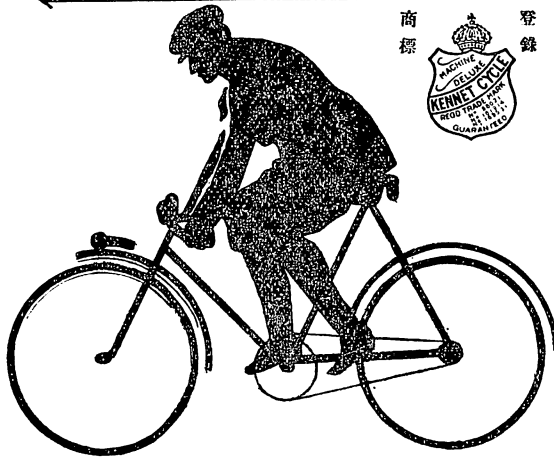
◆御知らせ◆

松竹興行宣傳部(編輯部)左の通り直通電話に變更になりました。
戎(76) 一五六三番

一 武士	一 武士	一 伊太夫	一 美蓉	一 長屋の女房	一 仲居娘	一 勤進比丘尼	一 老婆	一 魏屋女	一 梳き手	一 魏屋女房
士	士	妻	士	屋	女	ふる	女	女	手	房
武	の	お千鶴	不	お澄	おや	狸	小	おと	おと	おと
二	老	千鶴	二	子	や	の	き	き	き	き
田	爺	子	子	子	代	清	ん	め	め	め
	一	子	子	子	子	春	人	ち	ち	ち
	甲	子	子	子	子	入				
根	宮	筑	小	明	村	村	藤	村	村	村
本	崎	波	村	石	田	田	間	田	田	田
淳	啓	雪	京	久	竹	み	房	嘉	嘉	嘉
	夫	子	子	子	子	ね	子	久	久	久

ケノンツト号

萬人愛好の 撰良車



國産品中の完璧

是非御愛乗を

市内特約店ニアリ

株式会社 大澤商會
京都市三條通小橋西

丸小	麴屋	米長	勸進	美藝	麴屋	美定	質取	見物	武籠	旅籠	寺物	駕賣	新武	武駈	新物	新武	見百	鳩の	
岡	腰元	山女	比呂	容士	屋下	容士	取女	物士	籠屋	籠屋	賣籠	聞士	武駈	駈士	開賣	武開	物の	姓の	
ゆ	おせ	あお	取付	君お	おは	千代	おさ	の男	の客	引	者	者	馬	者	者	男客	の錢	賣	
き	鶴ん	き	咲林	江葉	ん	子が	代が	三五	男	男	二昇	三四	方	一昇	一三	二丙	り		

水谷	米津	此花	川瀬	志水	今井	榛名	友成	川崎	高橋
八重	左喜	咲子	静子	辰三	録郎	洋	若波	康夫	潤
子	子	子	子	郎	郎				

新版四ツ谷怪談

妹脊平三

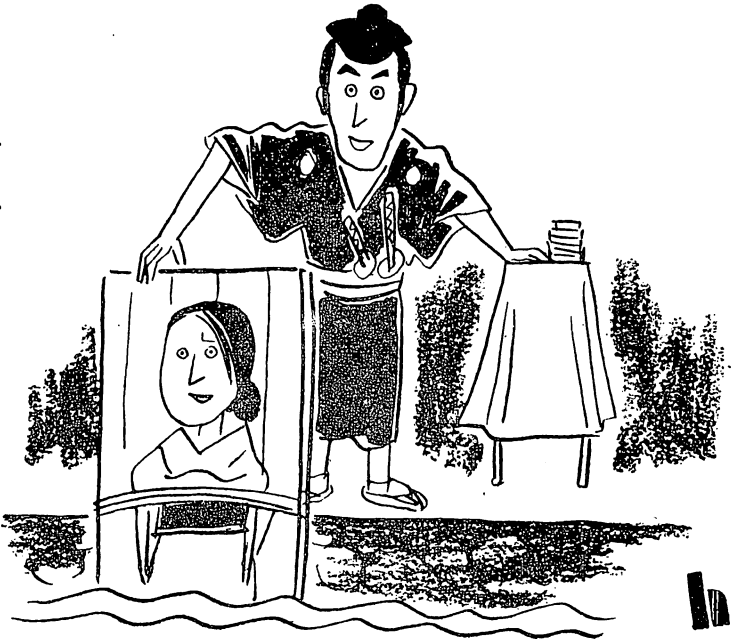
◇1◇

無産階級になつた伊右衛門クン、内職に洋傘修繕をやり出したのはいゝが、そこはそれバツトの様な黒襦子よりは矢張り柔しい女ものムバラツルの方が、いゝからねエ——といふので女もの専門するとワイフのお岩女史がこれを一々妬き出して職業戦線異状!



◇2◇

洋傘修繕を断然止めた伊右衛門はワイフのお岩女史に若き燕が出来たといひ出して成敗することになる。これをニュースで發表して一般公開といふことにする——尤も入場料は戴くことにして水中にはお岩女史を三十分以上漬けぬことにチャンミ前以つて相談済みナンテなか、ガツチリしてゐる。



新 劇 壇

● 白 井 信 太 郎 監 修 ●

關西に生れた唯一の
脚 本 雜 誌
愈々發刊さる

「新劇壇」同人

鳥 江 鏗 也
野 淵
山 上
森 田 信 義

各書店にて發賣中
一冊定價 40 錢
誌友となるは今！

大 阪 市 東 區 船 越 二 丁 目
『新 劇 壇』發 行 所

● 道 頓 堀 編 輯 部 に も 取 次 ぎ す ま ●

▽編輯後記△

村上勝

※本誌の編輯が私に廻つて來た。編輯者村上の再登場です、ごうかよろしく。

※七月の各座陣容は、歌舞伎座の男女優合同劇、浪花座は關西花形大歌舞伎の續演、角座は辻野の奮闘劇、神戸松竹劇場は十五年振り尾上菊五郎の來演である。唯中座の休場は淋しい。

※本誌の特別讀物は、長谷川伸先生、岡本綺堂先生が各々、その自作に就いて語られてゐるものである。これこそ、本誌なられてはの珠玉篇である。

※例によつて俳優諸氏には無厭な質問? 「私の特ダネ」なるものをお願いした。回答を寄せられた、梅島さん段猿さん、辻野さんに感謝します。

※話題となつてゐる浪花座の「四谷怪談」に

就いては高安先生、高谷氏が御寄稿せられ、殊に忍術研究家の大澤休象氏には、特別讀物として「忍術と怪談」をお願いした。

※その他、大槻たもつ氏、妹背平三氏の漫畫九里丸クンの漫談、本誌が誇り得る讀物揃ひである。

※別項廣告通り、脚本雜誌「新劇壇」が創刊された。私も及ばずながら、その仕事を手傳つてゐる。

※劇作家を希望される方や好劇家は、誌友となられることをおすゝめする。當編輯部に申込みまれても取次ぎ便宜を計ることになつてゐる。

※昨廿九日の豪雨は京阪神を襲ひ、殊に京都は名橋の流失など慘澹たるものがあると、各紙が報じてゐる。而かもラヂオは今夕「暴風雨」警報を發してゐる。雨未だ霽れず——誌上より、寄稿家、愛讀者諸氏にお見舞を申上げる。
(六月三十日夜)

昭和十年七月一日發行
月刊「道頓堀」第十年
雜誌「道頓堀」第百六號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島三丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵錢五厘稅)

昭和十年七月一日印刷
昭和十年七月一日發行

大阪市南區難波新地三番町

(大阪歌舞伎座内)

發行所 松竹興業株式會社大阪支店

共同編輯 山本 上 眞 也

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區難波新地三番町
(大阪歌舞伎座内)

發行所 松竹興行株式會社大阪支店
道頓堀編輯部

あぶら取紙始礎 辻と添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

專賣特許 常用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大 販
發賣元 朝日堂株式會社

大 販
本舖 中田スキナ屋謹製



昭和十二年六月廿五日
 昭和十一年七月一日
 第三種郵便物認可
 第一號
 第七月號



「道頓堀」第百六輯 第十年 七月號



一部 金參拾錢

大阪朝日新聞

三上於菟吉氏

連載

伊藤大輔氏 脚色

杉山公平氏 撮影

衣笠貞之助氏 監督



雪之囃変化



松竹京都都都影所超特
 蒲田・新・興・右・太・ロ・ブ・ロ・下・加・茂・總・動・員
 才一ル・トキ一豪華版
 林長二郎三役主演
 風野・德秀・三郎・高伏・堂見・國直・典江・特別演出